s Of The World Radiant Mythology　-剣戟のアリーヤ-

久々津 勇魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｔａｌｅｓ　Ｏｆ　Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ　Ｒａｄｉａｎｔ　Ｍｙｔｈｏｌｏｇｙ　－剣戟のアリーヤ－

【Ｎコード】

Ｎ１４１４Ｚ

【作者名】

久々津　勇魚

【あらすじ】

ルミナシアを襲った異世界浸食から暫く――世界は徐々に安定を取り戻し始めていた。そんな世界に、ダイランティアと呼ばれる別の世界から飛ばされてきたアリーヤ・タリズマンは、アドリビトムとの交流を通じ、自分の世界では成しえなかった「奇跡」を起こす。この二次創作は筆者の独断と偏見に基づいて書かれています。趣味の範囲内を超えない作品ですが、時々覗いてもらえたら幸いです。

人物紹介　『アリーヤ・タリズマン』（前書き）

人物紹介第一弾です。
今回はアリーヤについて書きたいと思います。

人物紹介　『アリーヤ・タリズマン』

◇　アリーヤ・タリズマン

種族：人間　性別：男性　身長：１７９センチメートル　体重：７５キログラム

年齢：２０歳　使用武器：蛇腹剣　クラス：騎士　一人称：僕

ルミナシアとはまた別の世界、ダイランティアからやって来た青年。「タリズマン」と呼ばれる世界樹に暮らす民族の唯一の生き残り。大人しい性格で、誰とでも柔らかい物腰で接する。女性に対しては若干奥手で、幼少より外部との接触は戦闘時のみだった為であり、ダイランティアを一人で旅をするまでは母親以外の女性を知らなかった。

五年前、腹部に負った古傷というのは、ルミナシアに転移する直前に、国家騎士団に所属するリオン・マグナスによって負わされたものである。時折、激痛に見舞われることもある。治癒術では回復しきれず、そのまま残ってしまった。五年前と謳っている理由は、全ての原因は自分にあると考え、アドリビトムにもリオン・マグナスが在籍しているからである。それらはすべて、彼の優しさからくるものである。

既存の技術では開発が不可能と言われている？蛇腹剣？を駆使した豪快な戦闘スタイルを採る。特殊な刀剣である蛇腹剣は規格外の

攻撃力と引き換えにかなりの重量を誇っており、それが影響して、剣を振り被る時は担ぐ癖が出来てしまった。また、蛇腹剣を使用した剣技は相応の負荷が掛かる為、格闘家顔負けの脚を使った格闘技もこなす。基本的には、剣技と格闘技を用いた近～中距離戦を展開する。他にも攻撃力や防御力を上昇させる補助術や、個人で使うには燃費が悪いものの高性能な全体治癒術を習得しているので、パーティの立ち位置によってはその真価を発揮する。

また、彼のドクメントはディセンダーのものと酷似しており、リタ・モルディオはダイランティアのディセンダーであると考えている。

◆ 習得術技

【崩蹴脚（ほうしゅうきゃく）】 上空から蹴りをあびせる特技。

【虎牙破斬（こがはざん）】 敵を斬り上げた後、追撃を行う特技。

【裂空斬（れっくうざん）】 回転斬りで敵を攻撃する特技。

【蛇喉烈破（じゃこうれっぱ）】 敵に剣の先端を叩き付ける特技。

【バリアー】 味方一人の防御力を一定時間上昇させる術。

【飛燕連脚（ひえんれんきゃく）】 連続して回転蹴りを行い、剣で止めを刺す秘技。

【獅子戦吼（ししせんこう）】 闘気を敵に叩き付け吹き飛ばす特技。

【虎牙連斬（こがれんざん）】　斬り上げの後、敵への追撃を行う秘技。

【シャープネス】　味方一人の攻撃力を一定時間上昇させる術。

【真空裂斬（しんくうれつざん）】　敵を浮かせた状態で高速回転斬りを行う秘技。

【崩殲華（ほうせんか）】　空中から下方に向けて、範囲の広い十文字斬りを行う奥義。

【猛蛇尾圧衝（もうじゃびあつしょう）】　蛇の如く敵に刀身を巻き付け、地面に叩き付ける奥義。

【ナース】　味方全員の体力を中程度回復する術。

【獅子戦吼・番（ししせんこう・つがい）】　二頭の獅子の闘気を敵に叩き付け吹き飛ばす秘技。

【魔皇刃（まこうじん）】　斬撃で強力な衝撃破を発生させる秘技。

【獅子戦吼・叢（ししせんこう・むら）】　群れで襲い掛かる猛獣の如く、連続で闘気を叩き付ける奥義。

【蛇王裂牙殺衝撃（じゃおうれつがさっしょうげき）】　伸ばした刃を引き戻し、敵を引き裂く奥義。

【絶空降魔斬（ぜっくうこうまざん）】　回転斬りの後、急降下して衝撃破を発生させる奥義。

【？？？】

人物紹介　『アリーヤ・タリズマン』（後書き）

以上です。
ゲーム本編とは違った術技が多いのですが、ご容赦ください。
【？？？】の部分は秘奥義を入れるつもりです。まだ使うつもりは無いので、とりあえず書かないことにします。
術技は他にも追加する可能性が高いので、意見も含めた感想をお待ちしております。

プロローグ（前書き）

特攻にも等しい今回の投降ですが、出来る事なら温かい目で見てもらえれば幸いです。
最近ではテイルズの二次創作が多く、自分もよく観覧して勉強させていただきました。
この手の書き物は好きではないと言う方は、戻るをお勧めします。

プロローグ

「世界樹」と、その「世界樹が生み出したとされる星晶（ホスチア）というエネルギー鉱物で

発展を続ける世界、ルミナシア。

しかし、星晶の力で産業が発展する国々がある一方で、それらの国から植民地化を強要されたり、

恵みを奪われる国もありました。

世界樹より生れし救世主ディセンダーと、空を駆ける船、バンエルティア号を拠点に活動するギルド、

「アドリビトム」の面々の活躍によって、世界に平和が訪れました。

ですが、まだ戦いの火種は残っていたのです。

プロローグ（後書き）

気付かれた方もいると思いますが、全部一から書きなおすことにしました。
大した文才も無く、オリジナルの世界観をつづるのは正直無理でした。

なので、原作に沿った設定のものにしたいと思います。

第1話（前書き）

一から書き直すことにしました。やっぱりオリジナルの世界観は早かったです。
自己満足の作品でよければ、見てやってください。

第1話

ロイド・アーヴィングとスパーダ・ベルフォルマは同じ二刀流の剣士である。手数の多さも魅力的だが、攻守のバランスにも優れた戦闘スタイルだ。その代わり、満足に扱うには相応の体力と筋力が必要となってくるのだ。この二人はそれを見事に使いこなし、数々の修羅場を潜り抜けてきた。

現在二人が居るのは、生態系が徐々に回復しつつあるコンフェイト大森林の緑の中だ。神秘的な雰囲気を打ち壊すかのように、ロイドとスパーダは疾走していた。彼らの視界に映るのは、素晴らしいまでの自然ではなく、依頼で提示された間引きの対象のそれだった。

「オラァ！　待ちやがれェ！」

種別に言うと魔獣系の魔物であるウルフは、何匹かの群れを成していた。実際なら恰好の獲物がいれば襲い掛かっているこの魔物は、現状だと「獲物」として追いかけられているのだが。

そうさせているのはロイドの前を走るスパーダである。アドリビトムでもガラの悪さが目立つ生粋の不良少年で、同じルームメイトのルカ・ミルダをイリア・アニーミとからかうのが日常となっているが、実際は義に厚い男らしい性格だ。

もう一人の双剣士、ロイド・アーヴィングとは同じ二刀流使いとなのでよく語り合ったりする。しかし大半はロイドのボケにスパーダが突っ込んでいるだけなので、傍から見たら漫才にしか見えなくなってしまうのが本人としても悲しいところだ。

獣道を巧く通って追跡を逃れようとするウルフたちを、二人は全力で追いかける。

「おいロイド！　このままじゃ埒があかねえ！　回り道して挟みこむぞ！」

「わかった、そっちは頼んだ！」

ロイドは木々の間をすり抜け、スパーダとは別々に行動することになった。

森の中を慌ただしく駆け回り、両者ともに疲労の色が見え始める。

「……ああッもう面倒臭ぇ！　ウィンドカッター！！」

悠々と聳える大木の根元を風の刃で切り刻み、ウルフたちの行く手を遮ったスパーダは、「ヒャヒャヒャ」と笑いながら、腰に携えた二本の剣の柄を握った。この時点で、先ほど指示を出したロイドの事はすっかり忘れている。

「どうしてくれようか？　ああん？」

?.窮鼠猫を噛む?とはまさにこの事である。

行き場を失ったウルフたちは、無謀にもスパーダに襲い掛かった。スパーダは好戦的な笑みを浮かべて斬撃を加えていると、あっという間にウルフは片付いてしまった。

「てこずらせやがって……あれ？」

……ロイドが、いない？

ここでさっきのやり取りがスパーダの脳裏を過った。

『このままじゃ埒があかねえ！　回り道して挟みこむぞ！』

『わかった、そっちは頼んだ！』

……すっかり忘れてた。

そのことに気付いた時には既に遅かった。前方の道は自分で塞いでしまったのだから。

「や、やっちまった……」

◆◆◆

「あれ？　スパーダのやつ、何処行ったんだ？」

道が交わるまで走り続けたロイドは、挙句の果てにわけの分からない場所まで来てしまった。

黒い土の湿った匂いは故郷の村を連想させたが、感傷に浸っている余裕は今の彼には無い。

「ちっくしょう、ここ何処だよ」

万が一に備えて持ってきておいた地図を両手に広げて位置を確認するが、全く判らなかった。

「しょうがない。道を引き返して――」

その言葉は続かなかった。咄嗟に飛んできた刃の様な物が、今まで持っていた地図を半分に切り裂いていたのだ。最初は植物系の魔物かと思ったが、ロイドの前には見知らぬ男が立っていた。

男の居る位置はロイドから十数メートル離れており、通常の剣では絶対に届かない間合いだ。しかし男の握っている剣の刀身は鞭のように撓っており、その長さも尋常ではない。更に、その刀身は引き戻されるようにして剣の形状になっていた。よく見てみると継接ぎのような剣で、エッジの効いた刃の禍々しさが印象的だった。

男の方は、年齢は対して高くは無いように見える。ロイドと同じかそれ以上かと言うくらいの、少しあどけなさが残った端整な顔立ちである。

咄嗟に身を退いたロイドは文句を言おうと口を開こうとしたが、向こうにいる男の言葉で遮られてしまった。

でもそれは、ロイドが思いもしなかった一言だった。

「ロイド・アーヴィング？　どうして君がここに居るんだ」

ロイドに面識は無かった。しかし男の方は彼の事を憎々しげに睨んでいる。

「誰だよお前！？　いきなり変な武器で襲ってきやがって！」
「君こそ、わざわざヘイズルから追って来たのか？」
「ヘイズル？　何だよそれ！　つーか話が噛み合ってないぞ！？」
「君に言われたくないね！」

仮に言うなら「剣状」となった武器を両手で握り直した男は、ロイドに向かって突き進んだ。

道に迷ったうえ、見知らぬ男に襲撃を受けたロイドは酷く困惑していた。やむを得ず剣を抜いたロイドは、男の剣を受け止めて言った。

「何だか知らないけど、俺はあんたの知ってるロイド・アーヴィングじゃないんだって！」
「ロイドじゃない？　二刀流でツンツン頭で真っ赤な服着てるバカのロイドが他にいるもんなのかな？」
「ちょっと待て！　落ち着けよ、な？」

ロイドの必死の説得が功を成して、男は渋々剣を納めた。戦闘の意思が殺がれてしまった男は、戸惑ったように辺りを見回す。

「……それにしてもここは何処なの？　僕は確か宿のベッドで寝ていたはずなのに、起きてみればここで寝ていたんだ」
「もしかして、カイルたちみたいにどっか別の世界から飛ばされてきたのか？」
「カイル？　カイル・デュナミス？」
「へ？　知ってんの？」
「あ……うん。けど、もし仮に僕が自分の世界からここの世界に飛ばされたとしたら、原因は何だろう？」
「う～ん、心当たりが無いわけじゃないけど……」
「そうなんだ……知らないとは言えさっきはいきなり仕掛けて悪かったよ。僕はアリーヤ・タリズマン」
「俺は……あッ、アリーヤは俺の事知ってるのか」
「一応知ってる……のかな？」

「いや、俺に訊かれても困るんだけど」

無駄な会話を繰り返し、気付いた頃には既に日が暮れていた。

〈コンフェイト大森林〉は昼間の神秘的な雰囲気から、何かが出てきそうな気味悪さを感じさせるものへと移り変わっていく。

話は後に、ロイドは一度〈バンエルティア号〉へ行くことを勧めた。無論、右も左も分からぬ状況で断る理由も無く、アリーヤ・タリズマンは複雑な心境のまま森の中を歩いて行った。

第1話（後書き）

まだ続きます。

何か意見などがあれば、よければコメント下さい。

ありがとうございました。

第2話（前書き）

第二話です。
この季節は寒く、パソコン作業なのでキーボードを打つ指が悴んで動きません。
泣きごとを言ってもしょうがないので、頑張ってやりたいと思います。

第2話

何が起きたのか、アリーヤはバンエルティア号の食堂の床に倒れていた。確かなのは、舌を蹂躙する痺れだ。原因は恐らく、先ほど口にしたシチュー（の様なもの）だろうが、そこまで考える余裕は今の彼には無い。

緊急事態に周りが騒然としていたが、段々と意識が遠退いていく。貧血で何度か倒れたことはあるが、今回はそれ以上の危険すら感じさせるものだ。マズイことになった、味でも状態でも。

――さかのぼる事二時間前。

『転送実験の失敗』による異世界からの召喚と言うことで収まったアリーヤは、この船を拠点とするギルド？アドリビトム？に身を置くこととなった。彼と同じ境遇の人間は他にもいるらしく、そこそこの親近感は芽生えたが、ダイランティアでも知った顔だと判ると、その感情も失せてしまっていた。

しかも空き部屋が無く、人数の少ない所で寝泊まりするという話になった時、アリーヤは何だかんだで理由をつけて、来客用の展望室を借りることになった。

荷解きの最中で夕食が出来たと呼ばれ、アドリビトムのメンバーとともに食事を摂ることになった。もちろん、知っている顔（あくまでもアリーヤの世界のだが）は居たので食欲はあまりなかった。だが、それはアリーヤだけに限らなかった。

全員が出された夕食を見て青ざめていた。その要因は無茶苦茶な

異臭を放つシチューと、今日の料理当番にある。

『ささっ、みんな食べた食べた～！　おかわりもいっぱいあるからね～！』

臭いだけなら、と勇んでシチューを啜ったアリーヤは、過去の例に漏れずその場で倒れていたのだ。

そして今、彼は死の淵を歩いている気分を存分に味わっている。大騒ぎの食堂の中心で虚ろに目を開くが、とにかく何が何だか分からない。気分も状況も非常にカオスだ。

「お、おい！　大丈夫か！？」

ロイドがアリーヤの身体を揺するが、当然のように反応が無い。命の危機には何度か遭って、食事でも半ば殺されかけたロイドは同情にも似た思いを抱いている。

「死んでる！？」

「いや、まだ息はある。早く医務室に連れてかないと！」

肩を担いでアリーヤを立たせたロイドは、アリーヤの脚を引き摺りながら食堂を出て行った。

予想通りの展開に、本日の夕食はお開きとなる。話によると、料理当番はアーチェ・クラインとリフィル・セイジだったそうだ。

◆◆◆

治療用のベッドから天井を仰ぎ見ていたアリーヤは、一瞬だが死を覚悟していた。今こうして意識があるのは、ある意味奇跡だとすら思えた。

恒例の『食中毒』だと言うが、あの清潔さが漂う空間でどうしたらああなるのか。やり場のない憤りを覚えた彼は、とにかくムスッとしていた。

「もう大丈夫だと思いますが、薬を出しておきますね」

この医療室を任されているアニー・バースから錠剤を受け取って、アリーヤは展望室へと向かった。比較的状態は良くなったが、若干足下が覚束ない。

「はあ……しんどい……」

壁に背中を預けて、私物の整理を再開した。リーダーのアンジュ・セレーナからお小遣い程度の軍資金を受け取っていたので、買い出しがあれば連れて行ってもらおうと考えていたりする。

アリーヤの置かれている状況はあまり好ましいとは言えなかったが、ダイランティアの逃亡生活に比べればマシである。来て早々絶対安静の事態に陥ったことは一度忘れ、気を取り直そうと頭を横に振った。

ふと目に留まった紙の筒を拾い上げる。この紙切れこそが、アリーヤがダイランティアで追われる理由となった原因である。こんな物は焼いてしまおうと何度も思ったが、彼にはそれが出来なかったのだ。

深いため息を吐きながら目の前を見ると、そこにはリンゴやブドウ、バナナと言った果物を抱えている、言わずと知れたロイド・アーヴィングとカイル・デュナミス、シング・メテオライトだった。

「ど、どうしたの？　そんなにこにこして」
「いや～、俺たちまだ死にたくないからさ、コーダに頼んで貰って来たんだ。一緒に食うか？」
「僕はいいよ……今は何も食べたくない」
「まあ、無理もないか。おっと、そういえば紹介がまだだったな」

ご機嫌なロイドをアリーヤは制すと、淡々とした口調で言う。

「カイル・デュナミスとシング・メテオライトだろう？　僕の世界では面識ある」
「へえ。ねえねえ！　君の世界の僕たちってどんなカンジなの？」
「対して変わらないよ。頭の悪いお人好しっていうふうに解釈してるよ」
「それ褒めてるのか？　貶してるのか？」
「両方……ところでどうしてここに来たの？」
「俺たち、いつもここでメシだったり作戦会議だったりするんだ。眺めもいいしな！」

言われてみれば、ここは展望室だ。常に一定の高度を航行しているので、天気さえよければ見晴らしがいいのは納得できる。

アリーヤも何とは無しに窓の外を眺めてみると、真下は殆どが海面で覆われている。月明かりを反射しているので、小さな島々が黒い点に見えた。灰色の雲がより一層、幻想的な夜を醸し出していた。

果物の甘い香りが鼻腔をついた。すでに夕食を開催していた三人は、ありったけの果物に齧りついている。

ダイランティアでは敵同士だった者たちが、今はこうして一つ屋根の下で過ごしている。アリーヤとして微笑ましくもあり、変な感じだったのは言うまでもない。ただ、こうして気兼ねなく話せる相手がいるのはとても嬉しい事である。

「よっしゃ、満腹になったことだし、明日の作戦会議といくか！」
「作戦会議？　何の？」
「明日、オルタータ火山の方で大型の魔物の退治に行くんだけどさ。お前も行くか？」
「魔物退治……リハビリには丁度いいかな」
「だろ？　報酬は四等分になっちゃうけど」

それでもよければ、という話なのなら断る事も無いだろう。体調にも依るが、やはりこの世界のことをよく知る必要があると考えた。帰るのが数時間後か、何カ月後か、何年後か――もう帰れなくなるかも知れないと言うのなら。

「じゃあ、お願いしようかな」

どこか余所余所しく、アリーヤは告げたのだった。
それが自分の不甲斐無さからなのか、はたまた直感的な嫌な予感なのかは、本人でも知り得ない。

第2話（後書き）

以上です。
次話は例の三人組＋アリーヤＶＳ魔物のお話を書きたいと思います。
何か意見などがあれば、コメントいただけると幸いです。
ありがとうございました。

第3話（前書き）

第三話です。
やっと三話……っていう感じがします。
何となくアクセスした方でも、そうでない方でも、一度見てもらえたら幸いです。
とはいえ駄文でしかないので、そこら辺は勘弁して下さい。

第3話

ダイランティアの彼らも凄かったが、やはりそれはルミナシアと言う世界でも揺るぎない事実であったようだ。

今朝早くからオルタータ火山で魔物討伐の依頼を計画していたところで急遽組んでもらっていたアリーヤは、早速距離を空けて三人の様子を見ていたが、その戦いぶりには舌を巻くばかりである。

「ふう。どうだアリーヤ？　これが俺たちの力だぜ！」

同意して何度も頷き返す。

見計らったように続々と小さい魔物が姿を現す。今度はアリーヤの番と言って、三人は彼の援護に就く。

騎士団正式採用の長剣よりも、何倍の重量を有する蛇腹剣を鞘から抜くと、通常なら剣など届くはずがない距離から踏み込みと同時に振り下ろす。

アリーヤは至って涼しい顔だが、その感情を代弁するかのように蛇腹剣の刃は魔物に向けて飛ぶ。凶悪な鋸の様な刃は奇妙な軌道を描いて複数の魔物を抉った。

餌食となった魔物たちは斃れ、拡散するマナとなって空中に消えていった。

甲高い金属質の音を立て、蛇腹剣はアリーヤの持つ本体に吸い込まれるようにして元の形に戻る。

「おお～！　スゲェ！！」
「ねえねえ、俺にも振らせてくれない！？」
昨日の食中毒から立ち直ったアリーヤの顔には、僅かに笑みが浮かんでいるが、それに気付かずシングは蛇腹剣の柄を握った。
「お……重いっ」
継接ぎの刀身の内部には、収縮性の高い特殊素材の繊維が張り巡らされている。その分、重量が肥大してしまった「欠陥品」と剣の師でもある父親がぼやいていたことを思い出す。
これを使いこなすには、相応の力量と技量が問われる。アリーヤは軽々と扱っているが、その裏には知られぬ努力があるのだ。
「僕の家系は戦闘民族みたいなモンだからね。血筋がどうこうってワケじゃないけど、そこそこ引き継がれてるのかも知れないよ」
謙遜の言葉を並べるが、彼らはそうは思わなかったらしい。
「何言ってんだよ？　こんなスゲェ剣を使いこなすなんて、相当な修業があったと見た！」
「そうだよ！　こんなに重いのにぶんぶん振り回してんだもん！」
遠心力という単語が過ったが、多分理解してくれないだろうと考えてアリーヤは口には出さなかった。
その後も順調に進み、目標の魔物の住処とされている地点へと到着した四人は辺りを見回すが、そこには大型の魔物なんていなかっ

た。熱く煮え滾る溶岩だけが、ぼこぼこと音を上げている。

「おかしいなー？　確かにここで間違いは無い筈なんだけど」

頭を掻きながらロイドは地図を睨んでいる。確かに、依頼の通りの場所に間違いは無いだろう。依頼主が目印に残したペイントもある。

「なあ、皆はどう思――」

ロイドの背後の溶岩が盛り上がった。滴り落ちる灼熱のマグマの下からは、熱にも耐え得る外殻に覆われた何かがそこにいる。

「うわぁ！？　いきなりかよ！」

自分たちの背丈三倍はありそうな魔物……ラーヴァゴレムに驚きながら、ロイドたちは剣を引き抜いた。

しかし最悪な事に〈ラーヴァゴレム〉は一体ではなかった。四人を囲むように、合計三体のラーヴァゴレムが立ちはだかっている。

「三人とも、用意はいい？」

三人が頷いたことを認めると、アリーヤは即座に術の詠唱を始めていた。その間、ロイドとカイルとシングは少ない足場を軽快に移動しながら、ラーヴァゴレムにちょっかいを出している。挑発しているのだ。

アリーヤには多少の補助術が使えることを、昨夜の展望室で確認していた。まずはアリーヤが戦力を底上げしたら、という戦法であ

る。

術の詠唱中は身動きがとれない。基本的には後衛は前衛に守られながらサポートをするのが定石である。今回のはそんなセオリーに基づいた戦い方だ。

「バリアー！」

アリーヤは物理的なダメージを軽減させる効果がある術を各個に展開し、自身も戦闘に加わった。

「虎牙破斬（こがはざん）！」

飛び上がったアリーヤはラーヴァゴレムに空中で連続斬りを繰り出した。今は蛇腹剣を普通に切れ味の良いロングソードといった感覚で剣を振るう。

ラーヴァゴレムを構成する岩を粉砕しながらも、アリーヤはその攻撃を止めようとはしない。そして更なる連撃を叩き込んだ。

「虎牙連斬（こがれんざん）！」

しかしこれだけではラーヴァゴレムは倒せない。他の三人が二体を相手取っているのなら、アリーヤにすべきことは何か？　焦る気持ちが募るばかりだが、この最悪の状況下で取り乱してはマイナス効果だ。

（だったら――）

全力を以って相手に勝つ。それだけだと考えていた。

裂帛の気合いとともにアリーヤは刀身内部の繊維を伸ばし、ラーヴァゴレムの頭部に届くほどの長さまで蛇腹剣を撓らせた。

「崩殲華（ほうせんか）！！」

獲物を捉えた大蛇の如く、驚くほどしなやかな刀身はラーヴァゴレムに到達した。途端、ラーヴァゴレムの外殻はバターの様に分断されていく。

刀身が腹部まで切り裂くとアリーヤは器用に身を翻し、一旦戻した刃を今度は横に薙いだ。

「斬り裂けええェッ！！」

額に脂汗を浮かべながら、軋む腕に力を込める。剣はゆっくりとラーヴァゴレムを上半身と下半身を分断していた。

刹那、アリーヤを達成感が満たした。堪らなく嬉しかった。

そんな自分に鞭を打ち、今度はロイドたちが交戦しているラーヴァゴレムへと目を向けた。

一体はすでに沈黙して溶岩に浸かっている。残るもう一体もかなり動きが鈍くなっていた。

しかし、身体はアリーヤの加勢したいという気持ちに反対したようで、何発か貰っていた攻撃の治癒に努めることにした。

「ナース」

呼ばれたように発生した小さく可愛らしい妖精が、四人の身体を柔らかな光が包む。

上位回復術を僅か数秒で詠唱を終えたアリーヤは、自分の持つ補助術でロイドらのサポートに就いていた。

剣術に優れた三人と、比較的何でもこなせることできるアリーヤは相性が良かった。

最後の一体を倒すのには、そう時間は掛からなかった。

◆◆◆

「ハァ……ハァ……何とか、なったな」

体力的にも精神的にも限界が来ていた彼らは、暑さからくる目眩を必死に否定すると、お互いの拳をぶつけていた。

「いやあ、アリーヤがいて助かったよ。色んな事が出来るんだな」

あの回復以降、殆ど攻撃を受けなかった三人は見たところ外傷は無い。

アリーヤは術を行使しているうち、体内に秘めたマナを消費してしまった。休めば回復するだろうが、この倦怠感は暫く治まる気配がしない。

無理矢理笑ったアリーヤの表情は優れない。しかし、それ以上に内心は嬉々としている。

ダイランティアでは敵として、ルミナシアではこうして仲間の様にしている。

（きっと、向こうでもこんな風に笑えるのかな）

故郷に思いを馳せていると、三人がアリーヤの名を呼んだ。

「帰ろうぜ！」

アリーヤは先に歩きだしたロイドたちの背中を、ゆったりとして、けれども置いて行かれないように追った。

第3話（後書き）

戦闘はちょっと難しいです。
まあ自己満足＋勉強のつもりで書いてますんで、よければコメント下さい。

第４話（前書き）

第四話です。
次回から別の章に入りたいと思います。

第4話

アリーヤがルミナシアに来てから一週間が経ち、バンエルティア号船内に彼がいる光景はごく自然なものとなっている。

いつも通り、一階ホールへと降りる途中の操舵室から外の景色を眺めていると、全体的に尖ったフォルムの体を持つ精神融合体、ニアタが彼に尋ねた。

「君の世界、ダイランティアについて訊きたいのだが、いいかな？」

寝癖を指で弄びながらアリーヤ小さく顎を引いた。その目はまだ薄らとまどろんでいる。

「――僕の世界は昔、マナに満ちた世界だった。根源エネルギーを土台に発展してきた人類の止まる事の無い欲望は、世界樹が三年に一度つけるマナの塊、？大いなる実り？だけでは満たされなくなってしまった。やがて戦史を迎えた人類はその一つだけの実りを争った。一部が繁栄し、多くが貧しく暮らす影では、多くの国が滅び、多くの血と涙が流された。まあ、こんなところ」

人間たちの愚かさに苦笑いを浮かべながら、アリーヤはニアタを伺う。もちろん、何を考えているかは想像もつかないが。

「君はダイランティアに居るここの者に追われていたと聞いた。それは何故なのか、訊いてもいいかい？」

最初は躊躇ったものの、アリーヤは一つ息を吐く。ニアタは了解したと見て、それまでは何も言いださない。

「じゃあ、聞いてもらおうかな。ちょっと展望室まで来て貰える？」
「解った」

ニアタはふわふわと浮き、アリーヤの肩の傍を着いていく。

朝が来たばかりの展望室は何時にも況して明るい。顔を顰めながらアリーヤは中央のカウンター席に腰を落ちつけると、しみじみと話し始めた。

「僕の家系は代々、世界樹を守護する番人として仕えてきた。でも、？大いなる実り？を狙う連中との戦いの中で疲弊していってね、父も母も、目の前で斃れたよ」
「……君も戦っていたのか？」
「もちろん。アレはその時に受け継いだ物なんだ」

顎でしゃくった先には、鞘に収まった蛇腹剣が立て掛けてあった。そんな状態でもその形状は凶悪である。

「趣味悪いだろ？　アレは僕たち？タリズマン？の一族に伝わる伝家の宝剣なんだ。何処で、何時作られたのかも判らない。以前あの剣の構造を調べたいって変わった人がいてね。それで判ったのは、あの剣は相手に苦痛を与え、肉を斬り裂く為の剣なんだって……正直悲しくなったけど」
「なるほど、それで鋸の様な刃が連なっているのか」
「まあ。戦いの最中、僕はここに致命傷を負ってしまった」

腹部を摩ながら嘯いた。

「これが原因で、暫く動けなくなった。その後は、国家間で協定が

結ばれて、？大いなる実り？は競技で勝ち取ることになったんだよ。その世界樹を護っているのは、腕利きの猛者だって話だけど」
「君は、その代表として世界樹を護ろうとはしなかったのか？」
「い、痛いところ突くんだね。そう思ったけど、怪我とあの剣を使いこなすまでに時間が掛かり過ぎた。もうどの道行っても世界樹の番人にはなれないって解った時には、世界樹の為に出来ることをしようと考えたんだよねっと……」

立ち上がると、荷物から取り出した紙の筒をニアタの前に広げた。何かの設計書に見える。

「これは世界樹からマナを搾取するための装置か何かの設計プラン。国家協働の研究所から盗って来たんだ。事前の調査で、この機械が世界樹に及ぼす負担はかなり大きくてさ。それで、あの剣を調べたいって言う人に見せて数字に出してもらったんだ」
「数字？」
「そう。世界樹の寿命のね」

途端、深刻そうな表情でアリーヤは、
「そしたら、この機械を使っても使わなくても、もう世界樹は、ダイランティアは――」

◆◆◆

食堂は朝食時間を終え、クレア・ベネットとスタン・エルロンの実妹リリス、種族不明のロックス（本名はロックスプリングス）は後片付けを始めようとしていた。

「すいません、まだご飯ありますか……？」

扉から顔を覗かせたアリーヤは、ぺこぺこと頭を下げていた。

「そういえば……アリーヤさんは来てませんでしたね」

「でも殆ど無くなっちゃったし……」

「でしたら、少々お時間をいただけますか？」

にこやかにロックスが言うので、素直に待つことにした。

そして出てきたのは、和風のソースを絡めたローストビーフとオニオンスライスのサンドイッチだった。

「こ、これは……いただきます」

美味しそうな予感に駆られ、サンドイッチに齧りついたアリーヤは感嘆を洩らした。

「昨夜のサーロインステーキのお肉が残っていたので、試しにローストビーフにしてみたんです。お味はいかがですか？」

視界が歪んだりぼやけたりしていることに気がついたアリーヤは、悟られぬように顔を伏せたまま食事を摂り続けた。テーブルマナーには口煩いロックスも、彼の意を汲んで何も言わなかった。

幸せな時間。

このささやかな時間を大切にしてゆこうと、改めてアリーヤは思っていた。

第４話（後書き）

以上です。

何かアドバイスとかがあれば、コメント下さい。

第5話（前書き）

どうも、なんだかんだで五話目来ました。
ちょっと短いですが、駄文でよければ楽しんで行って下さい。

第5話

僕がルミナシアと言う異世界に来てから一ヶ月が経った。

この世界の世界樹は新緑と乳白の色がとても綺麗だ。話によると、ルミナシアに存在するもう一つの世界の世界樹と一緒になったからだそうだ。もし、ダイランティアも同じようになれるのなら――

でも、それについては考えることを止めた。あまりにも他人任せで身勝手な、しかもこの世界を破滅へと導く結果にもなりかねないからだ。

創造によって紡がれていくこの世界と、先が見えてしまった元の世界。戻りたいかと言われれば、素直に頷くことは出来ないのかもしれない。僕は故郷の世界樹を護る為に存在する種族の生き残り。けれど、この世界で得たものを捨て去ることも出来ない。

ダイランティアで僕を追いかけていたロイドたちの様な国家の代表には、僕の事を知る人はいない。知ろうともしない。知らせようともしないのだから、当然なのだけれど。

しかし、この〈ルミナシア〉では嫌というほど首を突っ込んでくる。だけど、何も話せない。僕の事を知るのは、恐らく他の世界に精通したニアタだけだ。

世界樹を護ろうとしてしてきたことは、全て無駄に終わってしまった。

もし、ルミナシアの様に創造を行えるのなら……僕は自分の命を

厭わない。ダイランティアという世界が存続し、そこに住む民が滅亡するとしたら、果たして僕はどんな選択をするのか？

分かりもしない事を分かろうとするのはとても苦しかった。

だが、そう長く無いダイランティアを想うと、そうは言っていられないのが実情だ。

何れも選ばなければならない。血を貶めて世界を滅ぼすか、血に従って民を滅ぼすか。

僕には時間がない。

最早、別の道を詮索することなんて余裕は無かったのだから。

第5話（後書き）

以上です。

前回はここから新章と明記しましたが、予定変更で次回にします。

何かコメントなどがあれば、よろしくお願いします。

第6話（前書き）

第六話です。
すいません、次回から新章に入ります。

第6話

買い出しと依頼の発注を取りに、バンエルティア号はお馴染みの街の外れに停泊していた。各々が仕事や息抜きに遊びに向かったりと、自由な時間を過ごしている。

アリーヤはと言うと、リーダーであるアンジュ・セレーナの事務処理に精を出していた。

「ごめんね～、どうしても片付かなくて」

そう言う彼女の言葉には、謝罪の色など感じられない。社交辞令同然の言動にアリーヤは、

「いいえ、どうせ暇でしたから」

語尾を強めて反撃したアリーヤとアンジュの間に、ぴりぴりとした空気が流れ始める。異世界からの転送事故者と、腹黒聖職者による無言の争いだ。

（今日はユーリさんと一緒に絶品スイーツ食べに行く約束だったのに、この人は）

（ふふ……半分居候の身でダイエット中の私を差し置いて美味しい物食べようなんて許さないんだから）

してやったと微笑むアンジュに歯噛みするアリーヤだが、諦めて仕事に戻った。

「アンジュ様～！　先ほど焼き上がったチーズケーキはいかがです

か？」

愛らしい姿でぱたぱたと飛んできたのは、アドリビトムのコンシェルジュであるロックスだ。噂で聞いた話だと、この珍妙な生物はぽっちゃり系の女子が好みらしい。ましてやダイエット中の女性からしてみればこれ以上の天敵はいない。

「え……あ……いや……」「ロックスさん、僕にも一ついただけませんか？」

「はい、まだまだいっぱいあるので遠慮なくどうぞ。アンジュ様は幾つ召し上がりますか？」

食べるか食べないかの質問を飛ばし、ロックスは数を訪ねていた。

これにはアリーヤも失笑し、ちらちらとアンジュを見ては声に出さず大笑いしていた。

「じゃ、じゃあ一つだけ……」

負けを認めたアンジュは、悔しそうにアリーヤを睨む。しかし、ロックスが渡したチーズケーキはアリーヤが要求した「一つ」とは大きさが違っていた。彼の三倍はある量だ。

「ハイ、どうぞ。まだまだおかわりはありますので。他に欲しい物はありませんか？」

笑撃に腹筋が崩壊しかけたアリーヤは突然、笑いを呻きに変えた。

異常を感じたアンジュとロックスが慌てて駆け寄る。

「ど、どうかされましたか！？」
「いやっ……大丈夫、大丈夫だから」
額に脂汗を浮かべながら、しかし先ほどから笑っていたせいか頬が緩んでいるのか引き攣っているのか判らない。
「ちょっと昔に負った古傷が……痛むだけだからさ」
それでも彼は笑顔を取り繕っていることをアンジュは直感的に解っていた。ロックスも見た目に似合わず鋭く察した。
「病気とかじゃないんですよ？　ホントに……傷が痛むだけだから」
激痛が落ち着いたアリーヤは、脂汗を拭うとフォークを手に取った。
「いただきます。……やっぱりロックスさんは凄いなあ。こんなに美味しいの作れるんだから」
何事も無かった様に振舞うアリーヤを、本気で心配そうな目でアンジュは見据える。そこにいつもの腹黒さは感じられない。
「本当に大丈夫なの？」
「気に、しないで下さい。ちょっと外に出ます……」
食欲を無くしたように残りをロックスに渡すと、アリーヤはふらふらと甲板に向かった。
そんな背中を見てアンジュとロックスは顔を見合わせる。

「ねえ、ロックス」

アンジュは出来たてのチーズケーキに視線を落としながら嘯く。

「ハロルドによろしく言っておいて。費用ならこっちで負担するから――」

◆◆◆

エミル・キャスタニエとリヒター・アーベントは酒場のカウンターで依頼リストをまとめている。

師と弟子の様な関係の二人だが、リヒターはエミルにはある思い入れがあるらしい。常に気にかけている節がある。

（やはり似ているな……いや、だが、本人の筈は……）

もともと取りつき難い性格のリヒターを慕うエミルにとって、彼は気難しくはあるが本当は優しい人物だと解釈している。それを聞いた時のリヒターは至って居心地の悪そうな表情を浮かべていた。

「リヒターさん？」

呼ばれている事に気が付かないリヒターの肩に触れようとした時、エミルの背中に大柄の男が激突した。「うわっ！？」

それに気付いたリヒターが振り返ると、後ろでは乱闘が起きていた。発端は、ならず者同士の鉢合わせが関の山だろう。

事態の鎮静化に乗り出そうと、リヒターは席を立つ。

「お前たちは何を――」「おい、他人にぶつかっておきながら詫び一つも無ェのかよ？」

気弱で、しかしながら優しさを宿していたエミルの緑色の瞳は、何時になく燃え盛っている。その瞳に宿っているのは凶悪なまでの力強さと、全てを萎縮させる凶暴さだった。

「いい度胸だ。一人残らずぶん殴ってやっから来いよっ！」

狂喜に歪んだ笑みを零しながら、エミルは暴漢たちに突っ込んで（来いよと言った割には）一方的な私刑を開始しようとしていた。

頭痛に悩まされるリヒターは彼を止めるべく、力強く床を踏みだした。

◆◆◆

そこで湧きだす綺麗な淡水と魔物のカニ肉を求め、チェスター・バークライトとリッド・ハーシェルは〈シフノ湧泉洞〉に赴いていた。

食料庫の材料が乏しくなってきたので、今日は食材を含めた買い出しだった。しかしこの二人は狩人という性質柄、調達する食材の方が安上がりだし狩りを楽しめる方が良いのでここに来ているのだ。

「今日も大量だな」

機嫌が良さそうに鼻を鳴らすチェスターは、〈シフノ湧泉洞〉に生息する魔物〈クラブス〉を縄で繋いで引き摺っていた。リッドも同様で、台車に積んだ湧水を横目で見ながら言う。

「うまいカニにうまい水！　これ以上の贅沢は無いぜ～♪」

「あとはちゃんとした料理が出来る人だよな。とりあえずアーチェとかリフィルさんとかには厨房には立ってほしくないな……」

「同感だ」

例の食中毒事件を経験した人数は少なからず多い。各国の主要人物が多くいたが、彼らには幸い被害は無かった（逆にその主要人物によって齎された食中毒もある）。

他愛の無い話に華を咲かせながら、二人はひんやりと冷たい洞窟内を歩いていた。

◆◆◆

「はい、分かりました」

カノンノ・グラスバレーはメモ帳片手に依頼の内容を書き込んでいた。場所、目的、報酬。大切な部分はしっかりとチェックした。

「お仕事ですね？　はい、はい」

爽やかな笑顔で対応するのはコレット・ブルーネルだ。ロイドと

は幼馴染で、最近は「いい仲」になっている。バカと超天然ボケの響き合いはなかなか合っているものだ。

一方で、ユーリ・ローウェルはサボって人気スイーツ店に行ってしまい、アリーヤはアンジュに捕まって身動きが取れないらしい。

「ユーリさんって大人の割には、ロイドみたいなことするよね」コレットがそう言った。

勿論、その言葉に悪気は無い。

だが、それを後ろで聞いていた長髪の青年……ユーリは片眉をピクピクと動かしながらよく分からない笑みを浮かべていた。

「へえ、折角差し入れ持ってきてやったんだけどな。んじゃいいわ俺が食うから」

「え？　あ、ごめんなさい。私そんなつもりじゃ……」

うろたえるコレットに絶品と評判の？ブウサギケーキ？が詰められた箱を突きつけられた。

「ほらやるよ。ただし、仕事は任せたぜ」

「はい！」

そんなやりとりをしながらユーリは空を仰ぎ見る。

「今日もいい天気だな。お陽さんが眩しいぜ」

陽光が遮られる程度に腕を翳した。

――しかし、この時はまだ誰も知らなかった。悪意は静かに忍び寄っているということを。

第6話（後書き）

以上です。
既存キャラはそのまま書くのが難しかったりしますが、以外と楽しいです。
その点の御指摘などがあれば、コメント下さい。

第7話（前書き）

第七話です。
思ってみたら、自分でもここまで続くとは思いませんでした。新章にしておいてアレですが……
駄文でよければ、楽しんで行って下さい。

第7話

甲板で涼んでいたアリーヤは街を眺めながら浅い溜息をつく。腹部に当てていた手を離し、手すりに頬杖を突きながら、ぼんやりと辺りを見回す。

「……」

先ほどの振る舞いはいかがなるものなのか、いつまでああしていられるのかは判らない。けれど、決して突き通せるほどの嘘ではないのだ。

アリーヤが「古傷」と謳っている傷は、ルミナシアに飛ばされる少し前に、ダイランティアの騎士国家、フレスヴェルグの二大騎士団長の一人、リオン・マグナスに負わされたものだった。

だがアリーヤは憎悪も憤怒も感じない。あくまでも悪人はアリーヤであって彼ではなく、命令に忠実に従うのは国家の騎士としては評価すべき点だ。彼は悪く無い。

ただ直向きに世界樹の為にと悪事に手を染めてきた。殺すということはしなかったが、それよりも苦しい現実を相手に強いることは頻繁にあった。自分の武器がその様に設計されているのだから割り切るしか出来ない。言い方を変えれば開き直っているだけだが。

しかし、アリーヤは自分のしてきた事に後悔は無い。やり直す機会があるならきっと同じ道を選ぶだろう。

（頑固なだけだね）

苦痛めいた笑いを小さく浮かべる。

「アリーヤ君！」

アリーヤを呼んだのはアンジュだ。彼女は慌ただしい様子で伝える。

「あなたにお客さんが来てるの！」

「へ、お客さん？」

この世界に知り合いなどがいるはずがない。ましてやアドリビトム以外の人間と会話をしたことなど無いのだ。

疑問がしこりと残るが、その人物を無下にも出来ない。

一階ホールに戻ったアリーヤを待っていたのは、目を見張るほどの美人だった。黒々とした服装は清潔感が漂い、清楚な雰囲気の女性はアリーヤを見据えた。

「あなたがアリーヤ様ですね？」

「え、あっハイ」

「私はウリズン帝国所属、ウロボロス騎士団から参りました。スルーズとお呼び下さい」

深く頭を下げたスルーズという女性に、アンジュは眉を顰めた。

ウリズン帝国は以前から星晶（ホスチア）と言うマナを発する鉱物の採掘を民に強いてきた大国の一つだ。芳しいものではない噂も時折耳にしていた。このウロボロス騎士団という存在にも覚えがあるが、ここで

は思い出せない。

「今日は別に争おうとしに来たわけではありません。アリーヤ様を我が騎士団にお誘いに来ただけのことです。噂は常々伺っております、私は騎士団長の命によってこれをお持ちしました」

スルーズは一枚の紙を取り出すと、それをアリーヤに手渡す。

「契約書、ですか」

「はい。既にアリーヤ様をお迎えする準備は整っております」

アンジュも我慢ならないと言わんばかりにスルーズに視線を浴びせたが、スルーズ本人は至って平然としている。

「ちょ、ちょっと待って。アリーヤ君は――」「アリーヤ様はアドリビトムのメンバーでは無い筈です。選択権はアナタではなく、アリーヤ様にあると思われますが」

たじろぐアンジュを余所に、アリーヤは契約書に目を通していた。

「いかがでしょうか？」

期待の籠っていて、しかし危険の孕んだ声でスルーズは尋ねた。

そしてアリーヤは、納得したように頷くと契約書をグシャグシャに丸めてしまった。

「すいません、僕はあなた達の所には……いけません」

予想通り、と言わんばかりに微笑みを浮かべたスルーズはアリー

ヤを見た。

「そうですか、残念です。では、お気が変わったらご連絡ください――」

そう言い残すと、スルーズは背中を向けた。不敵な笑みも残して。

「アリーヤ君……」

「さて、僕も大分良くなったんでちょっと街に出ます。仕事のお手伝いはそのあとでやりますから」

決意を固めたアリーヤは清々しい顔でホールを出て行った。

◆◆◆

ウリズン帝国首都、ウロボロス騎士団本寮へと帰還したスルーズは真っ先に団長室の扉を叩いていた。

「よろしいでしょうか？」

「おう、入れや」

ドスの効いた声が帰ってくると、スルーズは扉を静かに開いた。

彼女の目の前のデスクに足を乗せているのは、ウロボロス騎士団を育て上げた伝説の騎士、エルンスト・ハリファックスその人である。

そんなエルンストはスルーズに尋ねる。

「どうだった？　勧誘は」
「団長の先見通り、断られてしまいました」
「だろうな。あーあ、面白い武器で面白い戦い方するっていうから誘ったんだけど……まあいいや、これからもっーと愉しくなるんだからさ」

煙管を吹かすエルンストは、壁に掛かったウロボロス騎士団の紋章を見つめた。

不死の象徴である、自分の尾を咥える蛇をモチーフにしたマーク。

ニヤけ面が張り付いた顔でエルンストはスルーズを見直した。

「自由のギルド、アドリビトムか。教えてやんなきゃな」

少しの間を置いて、

「それが良かれ悪かれ、自由ってのは、秩序の檻の中に在るもんだ。檻からで出ちまえば、それは単なる横暴にしかならないってことをな」

柱時計の音だけが部屋に響いていた。

第7話（後書き）

以上です。
御指摘あればコメントよろしくお願いします。

第8話（前書き）

第八話です。
まあ、ここら辺はいつも通りということで省略させていただきます。
駄文ですが楽しんでいって下さい。

第8話

アリーヤは規格外の攻撃力と重量を誇る長剣、蛇腹剣なる物を扱っている。

しかしその重さとして、使える剣技は多くない。脚を使った格闘技で補っていると言ったところだ。

彼は基本的に、格闘技を絡めた戦闘スタイルを取っている。この?蛇腹剣?最大の魅力である中距離攻撃が疎かになることの方が多い。本人としても、これよりも軽い武器を使おうと何度も思ったが、やはり先祖代々から伝わる家宝を易々と手放すことも出来なかった。

問題は武器だけではない。彼が使える治癒術や補助術も考える必要があった。

回復術については、複数を同時に回復することの出来る〈ナース〉だけ。補助術は、味方の物理防御を上げる〈バリアー〉、術防御を上げる〈レジスト〉だ。

?死霊使い(ネクロマンサー)?のジェイド・カーティス曰く、「器用貧乏なんですね〜」

この時はあまり相手にしてもらえなかったが後々訊いてみると、アリーヤはパーティ内での戦闘で活躍できる人材と返って来た。

個人戦闘でも経験豊富だったアリーヤとしては、格闘技から剣技へと持ち込めば済む。一人で使うには燃費が悪いが治癒術で回復出来るし、事前に戦闘があると知れば先に補助術をかければよいだけ

の話だ。

ルミナシアに来てからはパーティ戦闘をする機会が出来たので、ダイランティアでの戦い方に修正を加える必要があると考えていたアリーヤは、ロイドやカイルやシングの他に、クレス・アルベインやレイヴン、リフィル・セイジ、その弟のジーニアスを誘って模擬戦闘をすることにした。

彼らが来ているのはカダイフ砂漠だ。足場が悪く強すぎる日差しが体力を奪う劣悪な環境だ。

「すいません、今日は僕の我が儘に付き合わせてしまって」

「いいのよ。勉強熱心な生徒は歓迎すべきだわ。ロイドたちもアリーヤを見習ってほしいわね」

「せ、先生……」

一同の笑いが辺りに響く。

演習場所に到着した彼らは言う前に自分の獲物を手に取っていた。

「じゃあ、今回は僕とロイドとカイルとシング。他の人はそっちパーティを組むって事で」

全員が頷いた事を認める。

「それじゃあ、手加減抜きで行きますよっ！」

それを合図に前衛職が駆け出し、後衛が術の詠唱を始めている。

アリーヤも無意味に彼らに頼んだわけではない。クレスはアドリ

ビトムでも一、二位を争うほどの剣の腕を持っているし、リフィルやセイジは魔術師としては一流だ。残るレイヴンは胡散臭いが、短剣が弓に可変したり弓が短剣に可変したりする奇妙な武器を使っている。

ある意味で蛇腹剣とは似たようなものだが、実は違ったりもする。それを説明するのはアリーヤにも難しかったが、何となくレイヴンの戦い方が参考になると考えていた。

「レジスト！」

術防御を高めておけば生存率はぐっと上がる。何が起こるか分からない戦場に於いて、無駄にならない程度に出来ることはしておく方が良い。

クレスはカイルとシングを相手取っているが、それでもほぼ互角の戦いをしている。一方ロイドは、リフィルとジーニアスに標的を定めているが、それをレイヴンは弓による遠隔射撃で妨害をしていた。

「術士中心なのにバランスがいいなあ」

改めて感心すると、カイルたちを切り抜けてクレスがアリーヤに迫っていた、が。

「アリーヤ！　クレスが……ってアレ？」

消えた？　そう思ったアリーヤにだけ影が出来た。

「転移蒼破斬（てんいそうはざん）！！」

?時空剣士?の異名をとるクレスは、瞬間的な移動でアリーヤの頭上に迫っていた。

しかしアリーヤは顔色一つ変えず、蛇腹剣を砂に突き刺した。バランスを保ちながら、渾身の膝蹴りから猛る肉食獣の気を放った。

「獅子戦吼（ししせんこう）！！」

両者が衝突する。

宙に跳ね返ったクレスは着地した。見たところ、大したダメージは追っていないが、それはアリーヤも同じ事だ。

「蛇喉裂破（じゃこうれっぱ）！！」

蛇腹剣を担ぎ、大きく一歩踏み込んだ。

振り下ろされ蛇腹剣の刀身は一直線にクレスへと奔った。

不意を突かれ、防御姿勢に入ったクレスは強烈な一撃を受け止めて砂地を滑った。

「ぐっ！」

カイルとシングに目で会話を済ませ、アリーヤは後衛陣に向けて走る。

後を追おうとしたクレスを二人が妨害した為、彼は難なくロイドの隣に立った。

「どうっ？」
「ダメだ！　レイヴンって普段はアレだけど、戦うと強い！」
「喋っている暇があって！？」「グランドダッシャー！！」

力強くジーニアスが叫ぶと、砂を掻き分けて岩が次々と盛り上がる。波を連想させる岩から逃れる為、二人は砂地を蹴って飛んだ。

「させないよォ！」

矢がアリーヤの耳を掠める。他にも二、三飛んできたが、それはロイドが切り落としていた。

（届くか？）

見積もってもギリギリ伸ばして届くかどうかの位置にレイヴンは居た。

アリーヤは以前、ラーヴァゴレムに使用した空中での十文字回転切りを検討したが、一旦着地してから体勢を持ち直すことにした。

「ロイドはリフィルさんたちを！」

アリーヤは目もくれずに告げ、レイヴンを見据えた。

飛び上がって斬撃や蹴りを繰り出すが、レイヴンは全て紙一重で避け切った。

「そんな物騒なので攻撃されたオジサン、あっというまに終わっちゃうでしょ？」

「……ッ！」

短剣に切り替わった武装で斬りつけられ、怯んだアリーヤは頃合いだと治癒術の詠唱を始めた。

その間の隙だらけな彼をレイヴンが見逃すはずもない。距離を開けて弓で仕掛けた。

が、ここでアリーヤが凄技を見せる。

「嘘ぉ！？」

矢を全て空いた左手で取ったアリーヤは、丁度術の詠唱を終えた。

「ナース！」

クレスの攻撃を受けたカイルやシング、リフィルやジーニアス、レイヴンの猛攻を受けたロイドの体を召喚した白衣の妖精たちが癒す。

「まだまだこれから！！」

アリーヤはそう言い放つと、受け取った矢を圧し折って放り投げた。

◆◆◆

辺りは夕暮れで染まっている。

パーティでの模擬戦を終えたアリーヤたちは帰路に着き、疲れていたがどこか「楽しかった」みたいな表情で談笑していた。

「いやあ、アリーヤって強いんだね！　ロイド、もしかして負けちゃうんじゃない？」

「そ、そんなことないさ！　カイルとシングがいれば大丈夫！」

「えっ！？　一対三で戦うの！？　それは卑怯だよー」

「どちらにしても、遊び感覚でしていたら本当に強くはなれないわ」

「リフィルさんの言う通りだよ。僕もアリーヤとレイヴンさんの戦いをちらちら見てたけど、二人とも面白い戦いをするんだ」

「ま、武器が面白いからねオジサンは」

「ていうか、クレス強すぎだよ！」

「ははっ、僕なんてまだまださ」

「アリーヤもだけど、クレスもカッコいいなあ！」

シングは目を輝かせて言う。クレスもはにかみながら頬を掻いていた。

「でも、今日は勉強になりました。皆、ありがとう」

ふとアリーヤは思い出したように自分の腰を手で探る。

「あ、ポーチ落としちゃった。ちょっと取ってきます」

それを聞いたクレスは自分の手を叩き突然、

「え？　アリーヤ忘れ物したの？　ありゃりゃ」

一同に極寒の嵐が来たのは言うまでも無かった。

絶句したアリーヤは急いで元来た道を走った。

彼が見えなくなった頃、ジーニアスが気付いた。

「あれ？　レイヴンは？」

その行方を知る者はいなかった。

第8話（後書き）

以上です。
こうして書いてみて分かったんですけど、自分はロイドが好きらしいです（笑）

何か意見があれば、コメントよろしくお願いします。

第9話（前書き）

今回でやっと九話目です。
ここまで駄文を読んで下さった方、どうもありがとうございます。
これからもぼちぼちと書いていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

第9話

ポーチの中には行き先の地図、最低限の回復グミ類と、僅かなガルドが入っている。

先ほどパーティ戦の訓練で使用した砂地まで行くと、案の定ポーチは地面に落ちていた。

「お、あったあった」

それを拾ったアリーヤはポーチを腰に装着すると、そこから一歩も動かなかった。何処からかくる視線に気付いたからだ。

「……誰？」

岩陰からひょこっと顔を出したのは、不精髭を生やした胡散臭いオッサンこと、レイヴンだった。

拍子抜けした様に肩を落とすアリーヤだが、彼が感じたものはレイヴンのそれではない。

雰囲気が明らかに違うアリーヤに習って、レイヴンは辺りを見回した。

「……他にも結構いるねぇ。凄い殺気だわー」

わざとらしく大きな声でレイヴンが言うと、周囲のあちこちから人影が出てきた。夕暮れなので表情は伺えないが、その者たちが自分たちを見ていることは確かなようだ。

目的は何か？　強盗などの類が脳裏を過るが、それは見覚えのある顔が歩み出てきたことによって否定される。

「貴女は確か……スルーズさんでしたか？」

深く頭を下げたその女性は、先日アドリビトムへアリーヤを勧誘しに来た女性だった。

「となると、ここにいるのはウロボロス騎士団ってわけですか」
「お察しの通りです。本日は挨拶に参りました」
「要は、宣戦布告って事ですか」
「そう捉えてもらっても構いません」
「僕が入団しなかったから？」
「いいえ、アリーヤ様が入ろうが入らなかろうが、団長は戦いを挑むおつもりだったそうです」
「随分と好戦的なんだね」
「そういう人なので、ご容赦ください」

するとレイヴンが、下心丸出しの表情でアリーヤを肘で突いた。

「ちょっとちょっと、アリーヤ君この女性を知っているのかい？」
「すいません、状況良く見て下さいよ？　挨拶とか言ってる割に周りの連中殺る気満々ですよ？」

そんな彼らにスルーズは柔らかく笑う。

とても魅力的な女性だが、アリーヤは彼女から危険な何かを感じ取っていた。

「話が終わりなら帰りたいんですケド」
「ご自由にどうぞ」
「青年、後ろ見てみなさいよ」

レイヴンに言われて、後ろを振り返ってみる。そこにいたのは金属プレートを纏った大男だった。しかし驚くべきは、その男の背丈と変わらないくらいの長さはある大きな剣だった。

「あちらが今申し上げた我が団長、エルンスト・ハリファックスです」

スルーズの紹介もほどほどに、粘ついた視線を投げ掛ける大男基、エルンスト・ハリファックスは訊いた。

「お前が、アリーヤか？」

小さく顎を引いたことを認め、エルンストは長大な剣を構えた。

「なら話は早いな。一戦やろうや」
「……それ以外なさそうだね」

背負っている蛇腹剣を鞘から引き抜き、中段に構えた。

「オイオイ、アリーヤ君大丈夫？」
「心配しないで下さい。レイヴンさんかなり身軽だから、今から逃げれば皆に間に合うかも、です！」
、
蛇腹剣を担ぎ、アリーヤはエルンストへと駆け出した。

「来いッ！」

狂喜の笑みを浮かべながらエルンストは猛った。同時に剣を引き摺り、正面からアリーヤと激突した。

「ははははっ！！　まだ青いなア！！」

エルンストは大剣を横に薙ぐ。アリーヤは脇腹に迫る剣の腹を蹴り上げ、裂帛の気合とともに膝蹴りを繰り出す。

「獅子戦吼！」

獅子の気を甘んじて受けたエルンストは余裕の表情で見下ろし、嘲笑う。

「こんなモンか？」

「ならもういっちょ！　獅子戦吼・番！！」

更に凄まじい闘気がエルンストの巨躯を大きく弾き飛ばした。宙で舞っているそんな時でも、彼の顔から余裕の表情は絶えない。

「いいぞ！　もっと来い！」

大きく跳躍したアリーヤはエルンストの真上に到達すると、蛇腹剣の刀身を緩ませて縦方向への回転斬りをした。

繊維で繋がる刀身がエルンストの下腹部を捉えた。

「猛蛇尾圧衝！！」

アリーヤはエルンストの腹に刀身を巻きつけ、体躯を真下の地面

に放った。

砂漠に叩きつけられたエルンストは砂埃でその姿が見えない。だが、こんな時もスルーズは頬笑みを隠さずにいる。

「クク……クククッ」

不意に聞えた笑い声。それが今、地面に叩き落とした男のものだと判るのに時間は要さなかった。

問題はそれが上から聞えたことだ。驚愕に顔を歪ませるアリーヤの真上に、今度は大剣を構えたエルンストがいた。

「甘いなぁ？」

背後からアリーヤを柄で殴り、彼は先ほどよりも盛大な音を立てて地面を転がっていた。

「ア、アリーヤ君！？　本当に大丈夫なの！？　ねえ！？」

その声は届かない。

レイヴンはスルーズを一睨みして吐き捨てた。

「おたくら、あんな若いの相手にあそこまでしちゃうわけ？」

「国からそうしろと伝えられましたので」

やはり、ウロボロス騎士団を動かしているのはウリズン帝国の様だ。国の面子を貶めたアドリビトムに対しての攻撃ということになる。

戦慄したレイヴンの足下に、砂だらけのアリーヤが落ちた。気絶しているのか、指先すら動いていない。

「やっぱり、コイツは騎士団に欲しかったなあ。絶対に強くなれるんだけど」

砂を払ってレイヴンの前に立ったエルンストは、アリーヤを爪先で蹴る。

「おら、起きろよ」

凶悪なまでにドスの効いた声音がアリーヤを呼ぶ。

あれだけ吹き飛ばされても剣を握り続けたアリーヤのことをエルンストは大きく評価していた。大抵の人間はそのまま目覚めぬことが多いが、今回はそうはならなかった。

小刻みに揺れながら剣を杖にして立ちあがったアリーヤは睨みを利かせて言った。

「まだ、まだ……これから……でしょう……？」

「その心意気も買った、が。今日はもうこれくらいでいいや。もうちょっと強くなりな。続きはその後だ」

それを聞き終えると、アリーヤは糸の切れた人形のように倒れた。

最後に、自分に背を向けた男の背中を見つめながら意識はシャットアウトした――

第9話（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

ちょっと書き方が雑になってきてしまった気がします。まだまだ勉強が必要な様です。

アドバイスがあれば、コメント下さい。

第１０話（前書き）

第十話です。
今回は反省して（何を？）しっかり文章を（え？）書いて行きたいと思います。

第１０話

僕は世界樹を守護する？タリズマン？の生き残りだ。例えダイランティアの世界樹が枯れ、帰る場所が無くともそれは変わらない。そこに世界樹が存在するなら守るだけ。

結局、世界樹無くして？タリズマン？――アリーヤという存在は意味を成さない。そう思っていた僕はウロボロス騎士団の団長、エルンスト・ハリファックスに呆気なく敗れた。地面に叩きつけれらて以降の記憶は特に覚えていない。気を失ったからか、脳みそが都合よく記憶を編集したのか、僕には知る術はない。

あの闘いで、僕は今まで積み上げてきたものを根こそぎ持って行かれた気がしてならなかった。ダイランティアで潜り抜けてきた修羅場でのことも、ルミナシアでの過ごした日々も、無駄だったのだろうか？　僕にはもう何も出来ないのだろうか？　果たして自分に意味はあるのか？

途轍もない喪失感と後悔が残ってしまった。

――目覚めたくない。

何処からともなく聞えた自分の意思。

今すぐ目覚めたい、という気持ちの裏に隠された「真実」なのだろうか？　それでも僕は否定する。常に付き纏う事実を取っ払って、あの男に打ち勝ちたい。

――勝てるわけがないのに。

それを決めるのは強さじゃない。その者が抱える弱さだ。

弱さを知らない人間は強さを知らない。弱さを知った僕なら、今の僕ならまだ間に合うかもしれない。

――今まで、それが出来なかった。

そうだ。

それでも僕はやりたかった。何かが僕の背中を押してくれている気がした。

◆◆◆

アリーヤが目覚めたのはバンエルティア号の医務室のベッドだった。嗅いだ薬品臭が漂っているのだから、断定しても間違いは無い。何よりも言葉では言い表せないピンク色の天井があったのだから。

上半身を起こそうとするが、体中に激痛が走ってそれは叶わなかった。代わりに、途切れ途切れに呻くことしかできない。

何とか動かせる首を左右に少しだけ傾けると、見慣れた顔が肩を並べて立っていた。ロイドやクレスが心配そうにアリーヤの顔を見ている。

「動かないで下さい。全身が酷い打撲なんですから」

アニーが促し、アリーヤは薄らと開いた眼で側らの人たちを見つめた。

「あれ……僕、どうしてここに……」

「レイヴンさんが君を連れて来てくれたんだ。ウロボロス騎士団の方は、君と闘った後は何もしないで帰ったらしい」

クレスが安堵した様子で告げた。それに頷くことは出来なかったが、瞼を何度か瞬かせながらアリーヤは天井を仰ぐ。

「情けない……ほんと、情けない……」

アリーヤは目立たない程度に自嘲の笑みを浮かべた。あまりにも悲痛な姿に、誰もが言葉を失ってしまう。

そんな中、平然とした顔でリタ・モルディオは腕を組んで仁王立ちしている。蔑むような目つきでアリーヤを見下ろしながら言い放った。それは誰もが予想しなかった言葉だった。

「単刀直入に言わせてもらうわ。アンタのドクメントを調べてみたんだけど、普通のヒトとは似てるようで違ったのよ」

学者然とした口調で淡々と並べる。声音こそ少女だが、その態度は十五歳のものとは思えなかった。

「アンタは、ディセンダーとまったく一緒なの」

ディセンダー、という部分を強調しながらリタは言った。

ディセンダーはこのルミナシアの世界樹が産み落とす救世主であ

り、事実、つい最近まではこのアドリビトムのメンバーとしてバンエルティア号に乗船していたらしい。

アリーヤは博学者、ウィル・レイナードからある程度この世界について聞いていた。その中でもディセンダーと言う存在は少なからず登場している。

このルミナシアを危機から救った、正真正銘の救世主。それと同じと言われたアリーヤはとても悲しくなった。

たとえ同じディセンダーだとしても、自分は非力すぎる。このルミナシアよりも一回り小さな世界である故郷ですら守ることは出来なかったのだから。そう考えてしまったアリーヤはただ話に耳を傾けていた。

「あんまりアンタのこと知らないからはっきりとは言えないけど、？タリズマン？っていうのはルミナシアで言うディセンダーの事なのかもね」

唐突に言い渡されたその事実に、一同は黙って聞く他は無かった。

アリーヤは微かに震えた声でリタに尋ねる。

「僕は……君たちの世界を救った存在と同じ……っていうことなの……？」

「そ。まあ、あたしはアンタをディセンダーだとはこれっぽちも思わないけどね」

「おいリタ！　そんな言い方はないだろう！？」

我慢しきれなくなったロイドは強く言った。憤りを覚えた彼の体

は奮えている。顰めた眉も、握りしめた拳からも強い意志が感じられる。

だが、そんなロイドに憶するどころか、彼女は涼しげな顔で身動ぎ一つしなかった。

「じゃあ、他にどう言えばいいのよ？　少なくともコイツは、自分の事にすら諦観しているようなヤツよ？　そんなのに、どうやって優しく喋れなんていうのよー」

その通りだ、とアリーヤは思う。

何かを言いたくて、何かをやりたくて、アリーヤは身体に鞭を打って上半身を起こした。

「うくッ……そうだよ。僕は馬鹿だった。認めるよ」

諦めとも取れる言葉を口に出した。寝かせようとするアニーを手で制すると、それから暫く唇を噛みしめたまま俯いている。

アリーヤとてただぼんやりとルミナシアで過ごしてきたわけではない。ダイランティアでの振る舞いを否定するわけでもない。ただ、この世界に来て少しだけ変われた。そんな気がするアリーヤは皆の方へと向いて、目に涙を溜めながら、弱弱しく、しかしそれでも決意の籠った声で言った。

「それでも僕は……今からでも変わらなくちゃいけないんだ。本当の意味で強くならないといけないんだ。じゃなきゃ、守れるものも守れなくなる。そんなんで終わるのが一番嫌なんだ……」

その場にいた者はそんなアリーヤを見守っている。ただ、その表情には期待にも似たものが含まれていた。

「だから、お願いしますっ。僕は……僕は強くなりたいっ！！」

それは魂の叫びだった。

同時に両目から涙が溢れる。止めようとも拭おうともせず、アリーヤは一心に懇願した。

「何を言うかと思ったら、そんなこと」

呆れたと言った感じで突き離したリタだが、途端に不敵な笑みを浮かべた。

「ッたり前でしょう！　そうと決まれば、アンタはさっさと怪我を直すのね」

興奮したように医務室を出て行ったリタの背中を見送り、アリーヤは目を擦った。

「そうだぜアリーヤ！　お前には俺たちがついてる！　だから思いっきり頼ってくれよ！」

「そうだよ。僕たちにも出来ることがあるなら言って欲しい」

嗚咽混じりに何度も首を振り、一同の想いは結束した。

アリーヤは今、やっとスタートラインに立てた気がした。これは始まりに過ぎないのだと、改めて痛感していた。

第１０話（後書き）

以上です。

頑張った結果がこれですから、やっぱり自分なんてこの程度が限界ですかね……。

何かアドバイスあれば、コメントをよろしくお願いします。

第１１話（前書き）

第十一話です。
今回はウロボロス騎士団メインで書きます。
よろしければ、見てやってください。

第１１話

ウリズン帝国都市部では連日、職業案内所に長蛇の列が出来ていた。星晶採掘現場への派遣の仕事は多くあるが、この失業者の量は流石に捌き切れないだろう。当然、そうなった者は鬱憤を晴らす為の捌け口を欲するようになるだろう。

それを解消するのは、酒か、情欲か、暴力だ。

今日は昼間から酒を呑んだ暮れている者が多くいた。彼方此方から揉め事の予感がしてならなくなった警備隊がそこらじゅうに散らばっている。

スルーズは情けなくなって視線を伏せた。今日の彼女はオフなので、ウロボロス騎士団仕様の制服ではなく、私服を纏っていた。

（悪名高きこの国も、内情はこれですものね）

彼女の隣に、一人の男性が立っていた。その男は、スルーズも騎士団でよく顔を合わせる青年だった。

「どう思う？　この状況」

「こんな事で騎士団が巡回に出向いていることを思うと、頭痛がしてなりませんね」

白々しく指を額に当てたスルーズに、青年は眉間にシワを寄せた。

「あなたはどうなのですか？　ランドグリーズ」

騎士団内での名前で呼ばれた青年――ランドグリーズは苛々しながら辺りを見回した。

「どうもこうも、そこらじゅうに屑どもが溢れかえって反吐が出る。あとな、その呼び方やめろ。団長の野郎もネーミングセンス悪いよな。古い伝記の女神の名前で呼び合うなんてよ」

「私はとても気に入っていますが？　それに、団長ご本人はファーストネームに処刑執行人（ハリファックス）なんですよ？　こちらの方が余程シュミが悪いかと」

話題の尽きたランドグリーズは暫く黙って立っていた。スルーズは肩甲骨まで伸びた髪を弄んでいる。

ランドグリーズは思い出したようにスルーズに尋ねた。

「なあ、この前〈カダイフ砂漠〉で例の入団候補潰してきたんだろう？　俺いなかったからさ、教えてくれよ」

彼が聞きたいのはアリーヤの事だろう。蛇腹剣なんて空想上の産物としか思っていなかったスルーズとしても、興味深い人物だった。彼女は何故か、アリーヤという青年とエルンストが何処か似ていると思っている。それは自身でも判らないが、二人は同じ臭いがするのだ。

「アリーヤ様なら、団長に滅多打ちにされていました。暫くは動けないでしょう」

「死んではいないのか。へえー、そりゃあスゴイ」

見下すかのようなランドグリーズの仕草に、嘲笑うかのようにスルーズは鼻を鳴らした。それにかなりの怒りを覚えたランドグリー

ズは、握り拳をつくりながら踵を返した。

「どちらへ？」

気分を害した彼は、その問いに答えることは無かった。

遠ざかるランドグリーズの背をちらと見やると、またスルーズは髪を弄りだす。

「あなたでは、アリーヤ様には敵わないかと……」

嘯き、座っていたベンチから腰を上げたスルーズは、何処へともなく歩きだした。いつも踏んでいる石畳の感触が悪くなったと感じながら。

◆◆◆

ウリズン帝国王城内に在る国立図書館。ここは国の歴史が納めれている場所であり、利用できる者は科学者や大臣、皇族だけである。

この書士官として働く一方で、ウロボロス騎士団副団長の顔を持つラーズグリーズは、貸出記録の整理を行いながら窓の外を眺めていた。

渋い緑色の長い髪の間から生えている長く尖った耳は、エルフのそれと全く同じである。彼はエルフという立場でありながらも、人間の暮らす環境でこうした重要な役職に就けることは極めて異例である。

それもこれも、全ては騎士団長であるエルンストが決めたことだ。

皇帝は豪く彼が気に入ったようで、騎士団については度を越さない程度には自由を許している。問題さえなければ、その中にエルフやガジュマなどがいても別にいいというのが団長の考えだ。

（さて、どうしたものでしょうか）

貸し出している？魔物大全・中編？が返却期限を五分ほど過ぎている事に気がついたラーズグリーズは、いつもの癖で羽ペンの先で瓶の中のインクをかき混ぜていた。

（……またあのお方か。やれやれ、あれほど期限は厳守するようにと申し上げたのに）

空は生憎の雨模様だった。曇天は気分を憂鬱にさせる。同時に気持ちを落ち着かせてくれているようだ。

ラーズグリーズは一日の大半をこうして過ごす。それは今日も変わらなかった。

◆◆◆

レギンレイヴはウリズン帝国でも屈指の名家に生まれである。彼は剣術に於いて非凡な才能を発揮し、幼少の頃から本物の騎士たちと剣を交えた。

しかし、レギンレイヴは七人兄弟の末っ子で、当主も財産も継げない立場にあった。他の兄弟よりも剣の才能があったせいで酷く扱われた記憶しかない。

形として残ったのは自分の腕だけだった。

途方に暮れていたところをウロボロス騎士団に拾われ、現在では帝国を代表する騎士団の一人として活動していた。

今日は珍しい人物から手紙が来ていた。ベルフォルマ家の七男、スパーダからだった。

以前より、レギンレイヴの家はベルフォルマ家と交流があり、兄弟や父親を下していた二人は、意気投合するかのように良きライバルとして腕を競い合った。

スパーダは現在、家を飛び出してギルドの一員として充実した日々を送っているそうだ。レギンレイヴとしても喜ばしいことだが、スパーダが在籍しているのは――アドリビトムだ。

「敵同士なんだよねぇ……スパーダは僕の事を知っているのかな」

騎士団に入ったとは知らせていたが、正確な情報は伝えていなかった。今では正解だったと安堵している。

「くくっ、楽しみだなあ」

可笑しくてしょうがないとばかり口元を押さえ、ただ笑い続けた。

第１１話（後書き）

以上です。
一応主要人物として上の方々には出てきていただきました。他にも増える可能性が高いです。
何か感想やアドバイスがあれば、コメントよろしくお願いします。

第１２話（前書き）

第十二話です。
今回はアリーヤが単体で依頼で魔物の間引きで……
よろしければ見てやってください。

第１２話

黒の髪に魅惑的な勿忘草色の瞳、端整な顔立ちの青年が手洗いの鏡に映っている。この髪と目はタリズマン特有のもので、ダイランティアの伝記では？世界で最も美しい？とさえ記されていた。彼らにとってそれは誇りであり、一種のプライドでもあるのだ。

今では滅亡した国の上流貴族の一部では以前、この髪と目を求めて騎士を仕向けてこれを手に入れようとした。だが、逆にその騎士たちの首が送り返されたという事もあったらしい。

大いなる実りを巡る戦乱ではその名を轟かせ、「守護神」と恐れられたタリズマンも今は昔。遂に最後の一人となってしまったアリーヤはただの人間に過ぎないのだ。

（それでもこの世界では英雄とされるディセンダー、か）

そう思ったが、それはすぐに否定した。その人はその人、自分は自分だ。彼に出来るなら自分でも出来るという甘い考えを、アリーヤは心の片隅にも置かなかった。

「おはよう。いい朝だな」
「あ、おはようございます。ユージーンさん」

声を掛けたのはユージーン・ガラルドだった。彼はガジュマと呼ばれる獣人族で、見た目は歩く黒豹だ。軍人の様な振る舞いはダイランティアの彼と何ら変わらない。

ただ、ダイランティアのユージーンはユグドラシルバトルの際に

行方不明となっているのだ。噂に依れば、世界樹から溢れたマナの奔流に呑まれたということだったが、その人物がすぐそこにいると思うと変な感じしかしない。

「怪我の具合はどうだ？」
「上々です。今日からまた仕事に戻ります」
「そうか。それなら良いが、連中の動向には気を付けろ」

連中、とはウロボロス騎士団の事を指しているのだろう。

「情報屋に依頼して奴らの事を調べさせたんだが、ウロボロス騎士団の殆どは見捨てられた騎士らしい」
「見捨て、られた？」
「そうだ。生きているのに、死んだ扱いで戦場に取り残された者たちだ。そんな彼らを接収し、統率しているのが、騎士団長エルンスト・ハリファックスと配下の幹部たちだ。以前この船に来たスルーズとか言う女もその一人だろう」

ユージーンは個室の扉を開けようとすると、アリーヤは背中越しに告げた。

「全部使用中ですよ」
「む、やはりここはトイレの数が少な過ぎるな……」

◆◆◆

アリーヤは食堂で食事を摂る。セネル・クーリッジの作ったパンは絶品だった。それなのに、隣でパンにマイミソを塗りたくってい

たコハク・ハーツの気が知れない。知りたくも無かった。出来上がった味を壊す感覚なんて。

「この船にはスゴイ味覚の持ち主が大勢いるんだなァ……」

アリーヤは酷く青ざめた顔で呟いた。

「フン。以前出されたオムレツの方が凄かった」

ライマ国第二王位継承者であるアッシュが相変わらずの口調で言う。

「え？」

「ファラが作った、タバスコのかかったオムレツだ。あれは一種の兵器に成り得る」

「へ、兵器……」

世の中には様々な種類の人間がいる。その事実を尽く思い知らされたアリーヤは席を立ち、アンジュの居る受注カウンターへと赴いた。

「ん～！　これ美味しい！」

甘辛い特製ソースを絡めたトンカツを、今日セネルが焼いていたパンで挟んだ物をアンジュは頬張っていた。

「セネル様のパンは一流なんですから、色々と参考にさせて頂いて、昨日の残りのお肉で作ってみました！」

その側らには、カットトーストが載った皿を持ったロックスが飛ん

でいた。

「さっきから何か揚げてると思ったら、それだったのね……」

アリーヤはそんな二人に一瞥した。

「あら、怪我の調子はどう？」

「バッチリです。ウォーミングアップに魔物の間引きでも行こうかと」

「丁度いいわ。今日は〈コンフェイト大森林〉の方でネガティブプラントの討伐依頼が来てるの」

「じゃあそれを。あと……」

ロックスに見えないように口元を隠し、アリーヤはアンジュにこっそり耳打ちした。

「わざわざ減量したのに、振り出しに戻るつもりですか？」

腹黒く、食べ物に強い執着を持っていることはアリーヤも重々承知していた。そんなアリーヤの忠告を無視して、アンジュは残ったカツトーストに手を出した。

「ダメだこりゃ……。それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」「お気を付けて」

見送られ、軽く手を振りながらアリーヤはバンエルティア号を降りた。

◆◆◆

「崩蹴脚（ほうしゅうきゃく）！」

漆黒の植物が蹴りを喰らい、何百年も育った大木に叩きつけらる。

今回の依頼はネガティブプラントの四十体討伐。だが、アリーヤの周囲で蠢く同種の魔物の数はそれ以上にいた。軽く見積もっても百体近くはいる。

蹴りを繰り出した脚でそのまま上空に飛び上がり、空中から地面に向けて縦横の十文字斬りを見舞う。大きく刀身の感覚を開けた蛇腹剣は地面ごとネガティブプラントを抉る。

「崩殲華（ほうせんか）！」

数は一向に減らない。それどころか増えている気がする。アリーヤは焦る気持ちを面表には出さず戦い、地道に魔物の殲滅を計った。

着地した所で辺りを見回す。数は減ったが、それでもまだまだ多かった。

「どうなってるんだコレ？　依頼主のミス？」

足下に寄って来たネガティブプラントを思い切り踏み潰すと、マナの光りとなって拡散した。流石のアリーヤも、病み上がりでは疲労感が半端ではない。重大な剣を携えたまま宙に舞うだけの脚力も、体力的にかなりきつくなってきた。

「……ッ！」

頭上から降って来た数体のネガティブプラントに気付いたが、少々反応が遅かった。分厚い葉先が頭上に迫る時、予想もしなかった事が起きた。

銃声が森林内に轟く。その音の数は真上の魔物と同じだ。同時に、その魔物は吹き飛ばされていた。

「アリーヤ様、お気を付けて！」

その声の主は有ろう事か、ウロボロス騎士団のスルーズだった。

何故？　という疑問が一番に浮かんだが、今すべきは魔物の殲滅だ。

「真空裂斬（しんくうれつざん）！」

跳躍したアリーヤは縦方向への回転斬りを行う。この際も蛇腹剣は活躍し、地面を転がる車輪の如くネガティブプラントを斬り刻む。

右手にダガー、左手には拳銃を持ったスルーズも負けてはいない。先ほどの銃声で彼女の存在に気付いた魔物が襲い掛かっているが、大半は正確な射撃で到着前に撃ち抜かれ、突破した魔物にしても、スルーズに触れる前に斬撃を貫っている。

「チャージファング！」

飛び上がったネガティブプラントをダガーで一突き。その後も魔物に銃弾を浴びせる。

拡散したネガティブプラントも徐々にその数を減らし、二人は目を合わせること無くそれを成し遂げた。

◆◆◆

最後の一体をアリーヤは蛇腹剣で叩き潰した。スルーズは既に一段落していたようで、少し離れた所からアリーヤを見据えている。と言うよりは、見守っている、という雰囲気だ。

「助けてくれてありがとう。今日は何の要件ですか？」

挨拶もほどほどに、アリーヤは冷たい口調で突きつけた。一方のスルーズは、穏やかな笑みを崩さなかった。それはあまりにも魅力的な頬笑みだった。内心ドギマギしながらアリーヤは返答を待つ。

「ふふ、アリーヤ様は以外と初心なんですね」
「う、うるさい。免疫が無いだけだから」
「それが初心だと思いますよ？」

言い返せず、ただたじろぐアリーヤを見てクスクスと笑うスルーズ。しかし、未だその目的は話そうとしない。

「そろそろ、教えてくれてもいいんじゃない？」
「いいえ。今回はナイショにしておきます」
「……はぇ？」

思わず変な声が出たが、それだけこのスルーズという人間は非常に読みにくい。二十年生きてきてこんな女性と会うのは初めてだっ

た。

スルーズは不可解な笑みを浮かべたまま優美な動作で自分の唇に人差し指を当てた。

「それでは、私はこれで失礼します。アリーヤ様との共闘、楽しかったです」

そう言ってスルーズは踵を返した。

「あ、ちょっと」

呼び止めようとしても、彼女は待たない。

どうするべきか迷ったが、痺れを切らしたアリーヤはそのまま彼女の背中を追うことにした。

第12話（後書き）

以上です。
なんか……ですかね。違和感がある気がします。
アドバイスなどがあれば、コメントよろしくお願いします。

第１３話（前書き）

第十三話です。
色々考えなかった末、こんな展開になってしまいました。

第１３話

息を切らしながら走るアリーヤを嘲笑うかのように、スルーズは軽快に距離を離してしまう。

やがて姿が見えなくなり、樹木の陰にアリーヤは神経を研ぎ澄ます。居場所はマナの流れを感じとり、その場所へとゆったりと足を進める。

「スルーズさん、逃げてないで話して下さいよう」

緩やかに流れる清流の様な綺麗な金髪を揺らしながら、スルーズはアリーヤの目の前へと飛び出す。高級な石鹸の匂いがアリーヤの鼻をつく。

「内緒と言いましたが、そんなに知りたいですか？」
「もちろんです」
「騎士団へ来ていただけるならすぐにでもお話しますが？」
「そこを何とか」
「団長に怒られるのもイヤなので、出来ない相談です」
「お願いします」
「ダメです」
「お願いします」
「では、こちらの書類にサインを」

そう言って突き出したのは、以前にも見せられた入団契約の書類だった。軽く手で除けると、アリーヤはスルーズに訴えるような視線を投げかける。

「……駄目なものは、駄目なんです」

途惑うような素振りを見せながらも、スルーズは断る。粘り続けても無駄だと観念したアリーヤは、それ以上尋ねることは無かった。

ダイランティアでは自分の仕出かした事をよく訊かれたが、それに関して口を開くことは無かった。きっと、尋ねている方はこんな気持ちなのだろうとアリーヤは思った。誰しも話せないことの一つや二つはあるだろう。それに深く首を突っ込むのも如何なものか、改めて反省していた。

アドリビトムのメンバー、ルカが言うには「だって、無視されるのはとても辛いじゃない？」らしい。今はスルーズとこうして話しているが、彼女の受け応えが親切だから（と言えなくもない）会話が続いているのだろう。人間としてどうなのか（厳密に言うとアリーヤは人間ではないが）、深く考えさせられる。それを学ぶ機会は圧倒的に増えた。だが、やはり都合の良い方に持ち運ぼうとする自分に嫌悪感を抱くことも少なからずあった。

そんな自分をアドリビトムの面々は快く受け容れてくれた。彼らに危害を加える恐れのあるウロボロス騎士団の動向については鋭く目を光らせなければならない。それが彼らへの恩返しになるのかどうかは別の話になるが。

気になるのは、ウロボロス騎士団が何故、アリーヤを引き入れようとするのかだ。

ルミナシアに来てから一、二か月は経過したが、他のメンバーみたいに寄せられた依頼を達成していたわけではない。手伝いという形で参加はしていたが、ギルドのメンバーとして正式登録されてい

たわけでもない。ただ奇妙な剣を振り回しているからというちゃちな理由で、高名な騎士団が勧誘するわけがない。団長と一戦を交え、実力が認められたのなら納得だが、勧誘が来たのはそれ以前の話なのだ。

疑問に疑問が降り積もり、我慢しきれなくなったアリーヤは口を開いた。

「一つだけ、いいですか」
「何か？」
「どうしてあなた達は僕を誘うんですか？　アドリビトムには大勢実力者がいるのに」
「それについては団長に訊くしかありません。あくまでも私は、仕事として……でもないですかねぇ……」

語尾を濁しながらスルーズは応答した。

「考える限り、アドリビトムを接収したいわけじゃない。本国の指令で報復して来たわりには、礼儀正しいし。いきなり現れて戦えって言われたのは意外だったけど。それに、わざわざ僕を入団させようとする理由も分からないんです」
「……知りたいですか？」

小声だがはっきりとした口調でスルーズは言った。予想外の一言に一瞬驚いたアリーヤも、探究心を抑えることは出来ず頷いた。

「約束、してくれますか？　誰にも話さないって」
「分かりました」
「……そうですか。良かったです」

柔らかく微笑んだスルーズに、アリーヤの心臓が早鐘を打つ。誰もが惹きつけられるようなあの妖しいものではなく、陽だまりの様な暖かさを持った清々しいものだった。

「ウリズン帝国は現在、多くの住民が貧困に苦しんでいます。星晶採掘を強要し、民を犠牲に私服を肥やしてきた国家のなれの果てです。あのサレでさえも勝てなかったアドリビトムを我がウロボロス騎士団で潰せと御上から命令されました。団長は表向きではアリーヤ様たちを襲撃していますが、実際は逸材の選出と行動の準備を行っております」

「逸材の……選出？　行動の準備？」

「ウロボロス騎士団には国家に捨てられた騎士が多く在籍しています。改ざんして素性は隠しておりますが、そもそも国家に対して嫌悪感を抱いている彼らが絶対の服従を誓うはずがありません」

「それって、つまり――」

目を見開いた突然アリーヤが大きく一歩引き下がった。彼の立っていた場所には矢が何本か突き刺さっている。

「くッ……」

ホルスターから銃を抜き取ったスルーズは茂みに向けて何発か銃弾を撃った。小さく悲鳴が聞こえ、何かがドサッ、と音を立てた。

「どうやら、その御上もウロボロス騎士団を完全に信用しているわけじゃあなさそうだね。まだ他にも居る。巧く気配を消している事からして、随分な手練れですよ」

「マズイですね……」

「伝令はもう行ってるでしょうから、僕らを見たヤツらだけでもどうにかしないと」

蛇腹剣を抜刀し、背中を合わせてアリーヤ言った。スルーズも小さく頷き、地を蹴って駆け出していた。

ウリズン帝国が差し向けたと思われる騎士たちは、動揺すること無く二人を迎撃していたが、実力差は徐々に見え始める。

「アサルトバレット！」

スルーズは金属プレートの隙間から銃撃を叩きこむ。苦痛に顔を歪ませながら、潜伏していた騎士は地にひれ伏した。

スルーズは向かい来る相手に銃口を定めた。

◆◆◆

一方でアリーヤは、三人の騎士を一人で相手取っている。騎士たちは息を荒げながら、怯えたような目でアリーヤを見据えた。

「な、何なんだよコイツ……化け物かよっ」「畜生っ……！」「ダメだ、強すぎる……」

脂汗を浮かべる騎士たちは焦り、怯えながらアリーヤへと襲い掛かる。明らかに隙だらけな彼らの胴体に、気合とともに蹴りから放たれた獅子の闘気が炸裂した。

「獅子戦吼（ししせんこう・つがい）・番！」

吹き飛ばされ、重なるように叩きつけられた騎士たちは気を失って倒れた。アリーヤとしては記憶も飛んでくれればと願うばかりだ。

しかし、不意打ちを狙っていた一人の騎士が樹の幹から飛び降り、銀箔の意匠を施した剣を真下のアリーヤに突き立てた。

「オラァァァァッ！！」

――間に合わない。今日はこればかり続いている。

己の未熟さを噛み締めながら蛇腹剣の柄から手を離し、迫る切先を握る。丈夫な素材で出来たミトンのお陰で手が斬れることは無かった。剣の腹をしっかりと掴み、そのまま降ってきた騎士を地面へと放る。背中を強打し、大きくバウンドした騎士は白目を向いていた。

「悪いけど、勘弁してくださいよ」

その言葉は届かない。言い残したアリーヤは即行でスルーズの方へと向かった。

◆◆◆

（流石に手強いですねっ）

スルーズはダガーで長剣を受け止めながら蹴りや銃で敵の脇腹を狙う。運動性能を考えて、騎士が装着するプレートは他の部位と違って金属は使用されない。攻撃の通り易いのは考えるまでも無い。

それを理解するのは難くなく、敵もスルーズの戦闘スタイルを確認すると盾を駆使しながら接近戦を持ち掛けている。彼女もそれを許さず、銃撃で接近を妨害するが手に余ってしまったようだ。

強引にねじ伏せようとする騎士には力及ばず、遂に片膝を着いてしまった。騎士の爪先が彼女の鳩尾を蹴り上げ、視界が一時的にホワイトアウトした。

「うっ……くう……」

身悶えしながらスルーズは呻く。無抵抗になった彼女をその騎士は下品な目で見下ろした。

「へへっ、手古摺らせやがって」

舌なめずりしながらスルーズへと近づく男。しかしスルーズは逃げることは愚か、立ち上がることも出来ずにいる。

「さぁてと、愉しませてもらうとするか」「そうしようか」

男の真後ろに立っていたアリーヤは、蛇腹剣の刃を騎士に巻き付けた。恐ろしく斬れ味の良い刀身はプレートと身体に突き刺さる。

「き、貴様！？　何時からそこに！？」
「今来たばっか……だよッ！！　猛蛇尾圧衝（もうじゃびあつしょう）！！」

勢いよく地面へと突き刺さり、騎士の男は上半身が土に埋まった。

刀身を戻し、剣を鞘に納めたアリーヤはスルーズの元へと駆け寄

った。

「大丈夫ですか？　待って下さい、回復しますから。ヒール」

出現した妖精の看護婦たちは二人の傷と疲労を癒し、そのまま宙へと消えた。スルーズは気を失っているが、命に別状は無い。

（軽いなあ）

スルーズを抱き抱えて、アリーヤは歩き出す。ただ前だけを見据えて歩く。

この時は先ほどの話も、魔物の異常発生についてもアリーヤは完全に忘れ去っていた。

第１３話（後書き）

以上です。

何か最後、ビミョーでしたね。すいませんでした。

感想とかがあれば、コメントよろしくお願いします。

第１４話（前書き）

第１４話です。
今回は戦闘ナシで。アリーヤとスルーズがちょっといい雰囲気になったりならなかったり……

第１４話

スルーズが目を覚ましたのは、月が夜空に高く昇った頃だった。木造造りの古い部屋の中、暖かいベッドの上でまどろみながらスルーズは首を横に傾ける。蝋燭が暗い空間に僅かに灯していた。

「起きましたか？」

ベッドのすぐ側に置かれた椅子に腰を掛けているのはアリーヤだ。片手には黄ばんだ手帳が握られている。何かを記入していたようで、持っていたペンを手帳の背表紙に差し込んだ。

「その様子なら大丈夫そうですね。昼間は大変でしたけど、何とかなったみたいですよ」

スルーズは直ぐには理解できなかった。何故自分がここで寝ているのか、どうしてアリーヤがいるのかも。時間を掛けてゆっくりと思い出しながらスルーズは息を吐く。

眼前の青年は自分の肩を揉みながら、窓の外を眺めた。

「森林から抜けた所にこの空き家があったんで、ここで休むことにしたんですが……まあ警戒するに越したことは無いでしょうね」

アリーヤは苦笑いを浮かべながら椅子から立ち上がる。気を使ってか、足音を立てずに窓辺に歩いた。

「さっきも幾つか灯りが見えたんですよ。多分、僕達を探してるんだ」

深刻な表情で報告したアリーヤの背を見て、力強いなとスルーズは思った。男性だけあって、自分の華奢な体躯とは比べるも無く、がっちりとした筋肉を纏っている。思い返せば、ここに運ばれてくる途中でそんな腕に抱えられていたような気もするのだ。

（失態ですね……）

女性として、異性に運ばれるとどうしても体重が気になってしまう。常日頃からたおやかに他人に接してきたスルーズも、今回ばかりは年頃らしい事を考えるようになっていた。

ただ気恥ずかしくなって顔の半分を布団に隠した。スルーズは寝起きで潤んだ瞳でアリーヤを一心に見続ける。

二人の間に再び沈黙が訪れるが、アリーヤは先ほどからずっと黙っていたので不自然には思わなかった。スルーズとしては、ただ恥ずかしくてこの間が非常に苦しい。何か言おうとしようとしても、すぐに口を噤んでしまう。

そんな沈黙を破ったのはアリーヤだった。

「明朝にはここを発ちます。それまで、ゆっくり休んでください？」

以前よりこんなに優しくされることは滅多に無かったので、ちょっとだけ嬉しくて恥ずかしくなってしまった。ほんのりと逆上せたスルーズは、冷たい空気を吸おうと布団から顔を出す。

「あの……アリーヤ様」「アリーヤでいいですよ、何ですか？」

上体を起こしたスルーズは照れ臭そうにアリーヤに向き直った。
「その……ありがとうございます……」
「いえいえ。明日はウリズン本国まで送りますから」
その言葉に、最初は冗談かと思った。しかしスルーズが見たアリーヤという青年は、不必要に嘘を吐く人間ではないと解釈している。
途惑いを覚え、スルーズは焦った口調で尋ねる。
「そこまでされなくても」
「いえ、少し貴方のところの団長さんと話がしたくなりました」
「えっ……団長と？」
「今日の話を聞いたら、そう思って」
昼間、奇襲を掛けられる直前まで話していた事だろう。思い返したスルーズは納得したのか、小さく顎を引いた。
「……もしかして、ウロボロス騎士団へ来てもらえるんですか？」
「それとこれは話が別ですよっ！？　いや、あの団長さんがしようとしているのは戦争じゃないですか。内紛なんてことになったら多くの犠牲者が出る。それに、一つの騎士団で国家を相手取るなんて無茶苦茶過ぎます」
困惑するようにアリーヤは言う。先ほどとは打って変わって、少し曇った表情でスルーズは俯く。
「あの御方は……革命を起こそうとしているんです。腐敗した国の上層を打倒し、新たらしい時代を築こうとしている。一部が満たされ、多くが苦行を強いられる様をあの御方は心底憂いておりました」

彼女の言葉だけが乾いた小屋に響く。

アリーヤは改めて椅子に座りなおし、話を再開する。

「……僕はこの世界の人間じゃないから、どうこう言えないですけど、それでも何かを守りたいって気持ちだけはあるんだ。救えるものがあるなら救いたい。もう、僕の世界は限界が来ている。救おうとしたけど無理だった。だから、せめてこの世界で出来る事があるならそうしたい。ルミナシアのディセンダーみたいにはなれないけど……」

「アリーヤ様……」

「だから僕は、全力を以ってウロボロス騎士団を止める。生きているうちは、なんだって出来るんですから。こんな形じゃなくても、きっと他のやり方も見つかります」

アリーヤの意思は固かった。

アリーヤになら、全てを託せることが出来るかもしれない。不安と期待が入り混じった心境の中、スルーズはそんなことを思った。

「だからスルーズさん、僕に……僕たちに力を貸していただけませんか？」

スルーズは黙りこくった。

そして、ゆっくりと、力強く頷いた。

第１４話（後書き）

以上です。
次回は二人でウリズン帝国まで旅をします。
感想とかがあれば、コメントよろしくお願いします。

第１５話（前書き）

第１５話です。
最近は、自分でうちたてたキャラクターなのに自分で壊してしまっていることが多かったですねー、改訂ばかりで反省しています。
今回はカワイイやつが仲間に加わります。

第１５話

『ああ～、いい朝だ～』
『それでは参りましょうか』
『そうだね』
『ここからどう行きましょうか？　馬車を使うのも一つの手段ですが、恐らく検問が張られている可能性は否定できません』
『じゃあ徒歩しかないのか。長旅になりそうだけど丁度良かった。昨日のうちにルートは出しておいたんですよ』
『準備がよろしいのですね』
『旅をするなら目的があった方が効率がいいですし。とりあえず東に向かって、ブラウニー坑道からオルタータ火山を越えます』
『分かりました。お任せします』

◆
◆
◆

歩き始めてどれほど時間が経ったのだろうか。一向に木々の海から抜け出せそうに無かった。

昨晩持っていた手帳を片手に、アリーヤは神妙な面持ちで辺りを見回す。見渡す限りの自然はとても美しい。が、そんなことを思う余裕は、今の彼には無い。

ダイランティアよりも規模が大きいこのルミナシアに慣れていないだけ、道に迷った言い訳を自分に聞かせる。

斜め後ろを歩くスルーズの様子を覗うが、彼女は時々深く息を吸

うだけでそれ以上の行動は見られない。森林浴を楽しむ余裕が彼女にはあるのだろうか？　アリーヤは少しだけ羨ましくなった。

「……ホントにすいません。道に迷いました」

肩を落としながら謝罪の意を述べる。言い訳なんてそれ以上の意味を成さないのだから、迂闊に口に出すべきではないだろう。

そんなアリーヤを見て、スルーズはクスクスと笑っている。情けなくなってアリーヤは少しだけを頬を熱くした。

「そんなに笑わなくてもいいじゃ……ん」

アリーヤは急に足を止めた。それに習い、スルーズもそこで立ち止まる。

「アリーヤ様？」「アリーヤでいいです。そっちの方が呼びやすいならそれでもいいですけど」

研ぎ澄まされた感覚が何かを感じ取っていた。得体の知れぬ何かがこちらに近づいて来ている。

「追手ですか？」

小声で尋ねるスルーズにアリーヤは横に首を振る。

「違う。というか、人間じゃな痛ッ！！」

それは本当に一瞬だった。アリーヤの顔面に何かが激突すると、それは目にも留まらぬ速さで消えてしまったのだ。自分の拳と同じ

くらいのボールみたいだった。

何となく目で追ったスルーズは、一種の魔物ではないか？　と考える。だが、あのような魔物は図鑑でも見たことがない。

思わず尻もちを着いたアリーヤは目を何度か瞑り、半場放心状態になった。

「……何今の？」

「……何でしょうね」

アリーヤは煮え切らない想いで立ち上がるとその直後に、再びあのボールみたいな物体がアリーヤの後頭部を直撃した。

悲鳴をあげる間もなく、顔面から勢いよく地面に突っ込んだ。アリーヤは土の味を覚えさせられ、怒りと痛みで身体をピクピクと痙攣させていた。

だが、スルーズはアリーヤの頭の上に乗っかっているボールの正体に目を輝かせていた。

「まあ、可愛い？」

手の平サイズで、まん丸いボールの形状をしているそれは、長く尖った耳をパタパタと動かしながら可愛らしい鳴き声をあげていた。

「スルーズさん、僕の頭の上に乗っかってるのは何？」

「ブウサギですよ！　本当に小さくて丸いです！　ああ、短い脚も可愛いんですよ」

アリーヤはそのブウサギを掴み、四つん這いのままそれを目の前に持ってきた。

「お前は魔物か、魔物なのか」

「こんなに可愛い子が魔物なわけないじゃないですか～？」

普段は大人しいスルーズは興奮しながら無茶苦茶な事を言っている。女性はみんなこうなのだろうか、とりあえず好みにも依るだろうが可愛いものを見ると我を失う生き物らしい。

勝手にそんな事を思い込んでいたアリーヤは、その小さいブウサギを見て疑問に思った。

「でもこんなに小さいものなの？　以前牧場で任務をした時に見たブウサギの赤ちゃんでもブタにウサギの耳が生えただけなのに。これどう考えても胴体が……」

その時の依頼はライマ国第一王位継承者、ルーク・フォン・ファブレとその使用人、ガイ・セシルと共に赴いた。しかし、ルークに至っては『どうして俺がこんな豚臭い所で仕事しなきゃなんないんだっつーの！』と言い放ってそそくさと帰ってしまった。入り込んだ魔物を二、三体退治するだけだったのだが。

ボールを弄ぶ感覚で手のブウサギ（らしき生き物）を地面に転がす。期待を裏切らないその動きに、思わずアリーヤも口元が緩んだ。

「スルーズさん、コイツ凄く可愛いですね」

「私もそう思います」

その実、神速で体当たりをしてくるとんでもないヤツだ。油断大

敵と自分を律したアリーヤは立ち上がる。すると、ブウサギはアリーヤの足を登って彼の肩に落ち着いた。

「え、一緒に行くの？」

訊いて答えてくれるとは思わないが、返事として返ってきたのはあの可愛らしい鳴き声だった。

「お前、あのスルーズさんを骨抜きに出来るなんてスゴイよね。うん。素直にそう思う」

頭を指で撫でてやると、猫の様に喉をごろごろと鳴らす。そんな仕草を見て、スルーズは嬉々としながら眺めている。

「アリーヤ様が気に入ったみたいですね」

「怒らせないように頑張ります」

同意するように、またブウサギが鳴いた。

「でも、なんかブウサギって呼ぶのもアレだから名前付けましょうか、名前」

「いいですね！　じゃあ……？マルちゃん？でどうで」「それダメです」

同ギルドのマルタ・ルアルディを連想させる呼び名は無しにしたかった。と、ここでアリーヤはある事を思いだす。

「あ、最初からバンエルティア号で行った方が早かったかも」

名づけるのに夢中でスルーズは聞いていなかったが、まあそれも

いいだろうとアリーヤは考える。報告なら、最寄りの街でも行って、飼育している魔物に手紙や荷物を運ばせるワイバーン急便を使えばいいだけだ。

スルーズは突然閃いて、両手を音高く合わせた。

「アリーヤ様、この子の名前？パール？って言うのはどうです？」

「とりあえず見たまんまなんですね。ネーミングセンスは良く分かりました」

ああだこうだの協議の結果、このブウサギの名前は「パール」で収まった。再び歩き出す頃には、突然現れたブウサギは二人に何の違和感も無く馴染んでいた。

第１５話（後書き）

以上です。
人を加えるよりもこっちの方がなんかいいなーなんて思ってこのありさまです。
クィッキーの事もあるんで、きっといい感じになるんじゃないでしょうか。
感想とかがあれば、コメントよろしくお願いします。

第１６話（前書き）

第１６話です。
明日で今年は終わりますね。皆さまはどのようにお過ごしでしょうか？
今回は二人＋一匹の旅路を描きます。

第１６話

コンフェイト大森林を脱した頃には日がとっぷりと暮れていた。ブラウニー坑道に入り、食事を摂ってから一行は旅を再開することになった。

安価な燃料となる鉱石を大量に含んだこの鉱山に掘られたこのブラウニー坑道内は、汗と土と金属の錆びた臭いが充満している。バットなどの小型の魔物もそこらにいるが、襲い掛かる気配は全くない。人間と違って、実力差が判れば無駄に攻撃をしてくることはまずないのだ。縄張り意識が強い魔物の場合は話は別だが、入り口付近のこの場所ならそれらの魔物が現れることは無いだろう。

適当な石に腰を落ち着けて、アリーヤは昨晩泊まった古い小屋から、多少埃を被っていたが使えそうな調理器具を持ち出していた。水筒の飲料水を小さな鍋に注いで、マッチで火を起こしている。スルーズは興味深そうにその光景を見つめている。

「スルーズさん、その格好寒くないの？」

スルーズの着ているウロボロス騎士団の制服と思われる衣服は、動き易さを追求してか簡素に作られている。肌の露出も少ないとは言えず、ひんやりと冷えた坑道では少し寒そうな感じがした。

「慣れてますから。心配してくれてるんですか？」

「まあ……」

実際、アリーヤは内心穏やかではなかった。異性と二人で過ごすのも、複数で旅をするのも生まれてから経験した覚えがないのだか

ら。

以前、目の前の女性に初心だと言われて少し気にしていたアリーヤは、悟られぬように顔には出さず、黙々と火を焚いている。鍋を石で固定すると、携帯用ナイフで用意したタマネギやベーコンを刻み始める。

「アリーヤ様、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「何です？」
「昨日の夜の話、アリーヤ様は？自分はこの世界の人間ではない？と言いましたよね？」
「ああ、その話ですか。事実ですよ、僕はこのルミナシアの人間じゃないんです」

アリーヤの話してくれるダイランティアという世界の物語を、スルーズは熱心に聴き入っている。

以前はマナに恵まれ、そこに住む人々が栄えた話。世界樹に実るマナの塊を奪い合い、滅亡寸前にまで落ち込んだ人々の話。一族の役目である世界樹の守護。今日まで世界を育ててくれた世界樹への想い。その世界樹を守る為に、一人奔走した話。ダイランティアでも存在したアドリビトムの面々。ルミナシアに来てからの生活の様子。

悲しい出来事ではあったものの、アリーヤはとても楽しそうに話している。スルーズとも時々笑いを交えながら談笑を楽しみ、料理を作っている。

「――このルミナシアはいい世界だ、そう思う」
「そうですか……アリーヤ様は、とても苦労されたのですね」

「昔の苦労は今の力に繋がってるんだ。僕はいい経験をしたと思うよ」

出来上がったスープカップに注いでスルーズに手渡す。流石に冷えたのか、身体を摩っていたスルーズは嬉しそうにそれを受け取り、湯気の匂いを嗅ぐと、落ちついた様子でそれに口を付けた。

「……美味しい」

「それは良かった」

にこやかに笑顔を浮かべ、冷ましながらスープを啜る。体が中から熱くなった。偶然持ち合わせていたショウガを入れて正解だったようだ。

あれから一向にアリーヤの肩から降りなかったパールも、食事をする時は降りた。アリーヤは余ったタマネギとベーコン、少量のアップルグミをあげると、パールはそれらにむしゃむしゃと齧りついた。与えたのはアリーヤだが、ブウサギがベーコンを噛み千切る様は衝撃的だった。

「パールって一体何なんですかね？　見たこと無いし、珍しい種類だったりするんでしょうか？」

「私も、こんなブウサギを見たのは生まれて始めてです。最近は、新種の動物や植物が確認されていますから、それほど驚かなかったんですが……」

二人はパールを見る。円らな瞳で二人にバネの様な尻尾を振るパールは、そのまま食事を再開する。可愛い可愛いと思ったスルーズだが、さらにベーコンに噛みついたパールには驚いた様だ。

「何でも食っちゃうんだな、雑食？」
「食欲旺盛なんですよ、ね？」
食べかすを散らかし、満腹になったパールはスルーズの膝の上に落ち着くと、そのまま眠りに就いた。彼女は愛おしそうにパールを撫でる。

「何だか気持ちよさそうです」
「あの……スルーズさん」
「はい？」
「女性って……そういった所謂？カワイイ系？が好きなんですか？」
「私は好きですよ。まあ、似合わないでしょうけど」
「別に、そんなことは無いですよ。いいじゃないですか、夢中になれるものがあって」
アリーヤは無理矢理笑顔をつくり、スープを飲み干した。後片付けを済ませて、アリーヤは新調した大きなポーチに道具を入れる。
「じゃ、行きますか」
スルーズは頷き、パールを抱きかかえて立ち上がった。

◆◆◆

「アンジュさん、やっぱりアリーヤいなかったよ」
コンフェイト大森林から戻ってきたロイドは疲れた様子でアンジュに報告した。

「アリーヤ君何処に行ったのかしら……」

依頼書を分別していたアンジュは手を止める。重く吐いた溜息はそれ以上の疲労感を伺わせた。

ウロボロス騎士団はあれ以来、アドリビトムにちょっかいは出してこなかった。しかし、彼らがアリーヤを狙っているのは明白だった。アリーヤを一人で任務に行かせたアンジュは、少し後悔している。

「先ほど情報屋から通達が来た」

そう言って現れたのはユージーンだった。

「ロイド、コンフェイト大森林で何か見なかったか？」

「え？　見てないよ」

「そうか。実はな、ウリズン帝国の？銀色（シルバータスク）の牙？があそこにいたらしいのだ」

「？銀色（シルバータスク）の牙？？」

「今までウロボロス騎士団と競い合ってきた騎士団でな、エリート志向の高い連中だ。何でも、最近ウロボロス騎士団に不穏な動きが見られたらしく、本国の命令で動向を探っていたらしい」

その場の雰囲気が意気消沈とする。不安だけが彼らの心を支配していた。

「でもユージーンさん。情報屋なら、この船にも居るじゃないですか？」

「ジェイか……彼は非常に優秀だがまだ幼い。危険な橋を渡らせる

気にはなれん」
「それは心外ですね」
何処からともなくジェイが寄って来た。いつもと同じくその表情からは感情が読み取りにくい。
「あなたは能力ではなく、年齢などで人を決めるんですか？」
「君のプライドの高さは判っている。だから、今回は君の良く知っている人に頼んだ」
「僕の知っている人？」
「ああ、君をその業界に引き込んだ人間だ。安心しろ」
「……そういうことですか」
気に食わない。そんな事を思いながら、ジェイは何も言わずにその場を去った。ユージーンは彼の小さな背中を見て、マオと照らし合わせていた。
「で、話の続きだが、その騎士たちは軒並みボロボロだったらしい。少なくとも、アリーヤは無事だろう。真っ先にここに帰って来なかったのも、何か事情があるのかもしれん」
「アリーヤを信じるしかないか……」
「そうね……」

◆◆◆

アリーヤたちは坑道の奥深くへと来ていた。以前、アドリビトムで雇っている傭兵のクラトス・アウリオンより、オルタータ火山へと通じる道があると教えてもらったアリーヤは、手帳にメモした通

りの道順で足を進めている。今回は順調に行けそうだ。

「クラトスさんの言う通りだ。こっちで間違いない」
「クラトス……？　クラトス・アウリオンの事ですか？」
「知ってるの？」
「いえ、団長が騎士団を結成する当初、彼を誘ったらしいんですけど断られたそうです。もう随分昔の話ですし、退役して何かされてるんですか？」
「いや、まだバリバリ現役です。というかあの人、天使だからもの凄い長生きだし」
「そうなんですか？　今お幾つなんです？」
「確か……四千歳」
「よ、四千？　はあ、副団長の五倍は生きてるんですね……」

最初は彼の事について話すのが億劫だったアリーヤだが、スルーズは種族の差別をするような人間ではないと知って安心した。

その理由はウロボロス騎士団の特徴にある。

見捨てられた騎士を吸収して発達したウロボロス騎士団には、多種多様な種族が在籍している。幹部にも、ハーフエルフやガジュマの様に軽蔑視されるような者が昇格しているのだ。彼らの共通点は、実力者であることと、国家に対して悪いイメージを持っているということだ。

そんな彼らは、やはりエルンストの掲げる思想に賛同していた。忠誠を誓っていた自分たちを裏切った国が許せないのだろう。しかし、エルンストが戦乙女の名前を付けた幹部に関しては少し事情が違ってくる。スルーズもそうだが、あくまでも団長に従っているだけで個人のそれではないのだ。

例えば、ランドグリーズは団長とは引けを取らぬほど非常に好戦的な人間であり、戦う事で快感を得ることの出来る人種だ。スルーズは正直言って彼が嫌いだった。

副団長のラーズグリーズはハーフエルフとして蔑まれてきた過去がないわけではないだろう。だが彼自身、八百年も生きていればそんなことに気を取られるはずもない。実質、ラーズグリーズはその能力を認めさせて成り上がった人物である。彼が団長に肩入れする理由は判らないが、少なくとも命令に従ってプランを建てているようにしか思えなかった。

レギンレイヴはウリズンでは権力のある貴族の末っ子だ。確かに家督や財産は継げないだろうが、彼は「ラストフェンサー」と謳われるほどの剣の腕を持っている。それだけでも十分地位は築けた筈だ。スルーズの思うところ、レギンレイヴは一種の反抗期なのではないかと考えている。

思惑が交錯するウロボロス騎士団の中でも、外部との交流を任され続けてきたスルーズはエルンストの事を良くは思っていなかった。野蛮で乱暴で、力でねじ伏せるような人物だと当初は思っていたのだが、彼の印象を変える切っ掛けとなったのは、やはりエルンストの掲げる思想だった。

スルーズは商家の一人娘として比較的裕福な暮らしをしてきた。父親の趣味の狩猟で銃を握る機会が多かったのは、現在でも拳銃を使う一つの要因である。十五歳のある日、実家に騎士団結成前のエルンストとラーズグリーズが訪ねて来たのは記憶に古く無い。

あの時のエルンストは、彼女の実家に物資と資金の援助を依頼し

に来ていた（話を進めたのはラーズグリーズである）。まだ子供だったスルーズを見て、エルンストは可能性を感じたと言って半場強引に入団を勧めた。皮肉にもすぐに才能は開花し、銃だけだと騎士らしくないと言って、ナイフの手ほどきも受けていたのだ。結果、今ではダガーと銃を駆使し、騎士団内では「本物」と皮肉られることも少なくない。

ウロボロス騎士団に違和感を覚えたのはこの時からだった。結束しきれてない想いが錯綜ているからだろう。

誰もが理想とするその構想にスルーズは賛同した、筈だった。

けれども、何時からかその目的が何なのか、分からなくなってしまった。

どうしてだろう？　それは自分でも判らなかった。結局、自分が望んだのは形だけの平和だったのかもしれない。

――それを教えてくれたのは、自分の前を歩くこの青年だった。

「ウロボロス騎士団が結成されてからまだ五年しか経ってないのに、今では国を代表する騎士団の一つですものね」

「騎士っていうのは国を守る盾と矛ですからね。強さもさながら、見栄えも大事ってことでしょう。その点で言えば、両方を備えている騎士団よりもどちらかに特化していたほうが面白いと思いますよ」

しっとりと湿った坑道内にアリーヤの声がこだまする。

「でも、急成長した騎士団で多く見られるのは権力志向とかですかね。その点でも、ウロボロス騎士団は異色の存在ですよ」

「……アリーヤ様は、昔から騎士と剣を交えていたから」
「嫌でも騎士について考えさせられましたよ」

苦笑いを浮かべるアリーヤは、オルタータ火山へと通じるポイントに到達したことを確認する。

「よし、着きました」
「ここから火山へ行けるんですか？」
「はい。火山は今ほど歩かないから、暑さと魔物以外は楽だと思います」
「私は大丈夫ですが、この子はどうでしょうか……」
「大丈夫ですよ。まだ水は有りますし、気を付ければどうってことないでしょう、な？」

起き上がったパールはスルーズの腕の中、返事を返す要領で鳴いた。

「じゃあ、行きますか」
「はい」

二人は力強く歩き出した。不安と恐怖、それに勝る希望に背中を押されながら――

第１６話（後書き）

以上です。
というか、一番長かったですね。心配なので、誤字脱字があれば、指摘お願いします。

第１７話（前書き）

第１７話です。
今回もあの二人がいい雰囲気に……が、それだけで終わらせませんン。

第17話

オルタータ火山の灼熱地獄から脱した頃には、既に夜明けが訪れていた。冷たく、新鮮な空気に出迎えられたアリーヤたちは大きく息を吸った。

汗だくになったアリーヤは気持ち良さそうに手で額の汗を拭う。夜通し歩いているので体力的には厳しいものだが、その疲れを吹き飛ばすくらいに朝焼けは最高だった。

「何か、眠くなって来ちゃいましたね」

こんな達成感の後にはぐっすりと眠れそうだが、今は少しでも時間が惜しかった。この時間帯なら、多少は本国に入り易くなるかもしれない。

そう考えたアリーヤは睡魔と格闘し、自分の体に鞭を打って歩きだした。

スルーズはやはり眠っているパールを抱き、アリーヤの後ろを歩く。時々欠伸をしていることからして、彼女もアリーヤと同じ状況だろう。そんなスルーズを見て、アリーヤは無理をしているのではないかと心配になる。

「スルーズさん、少し休みますか？」

「私は……大丈夫です……」

彼女はそんな強がりを言ってみたりする。半分目が閉じているので、説得力は無いに等しい。素早く察知したアリーヤは手招きして

木陰に腰を落ち着けた。

「無理しないで下さい。まあ座って座って」

水筒から残り少ない水をカップに注いで、スルーズに手渡す。アリーヤは同時にパールを引き取り、スルーズは彼の隣に座り込んだ。

案の定、彼女は直ぐに寝息をたてた。オレンジグミを口の中で転がしていたアリーヤの肩に、彼女の頭が乗る。思わずグミを飲み込みそうになって、何度か咳き込んだ。

「……すぅ」

疲れが溜まっていたのだろう。即行で熟睡したスルーズにどぎまぎしていたアリーヤは、耐え切れなくなって彼女から離れようとしたがこれが余計だった。

動いた結果、支えを失って倒れたスルーズの身体はアリーヤの太腿に凭れた。先ほどの倍ぐらい心臓が跳ねるアリーヤの頭はすっかり逆上せあがっていた。

（知りあって間もないのに……この展開はちょっと……）

遂に鼻血が垂れた。手で押さえながら、ポーチの中から解れたハンカチを取り出し、鼻を押える。

（ううっ……やっぱり歩いとけばよかった……！）

眠気もすっかり吹き飛び、アリーヤはスルーズが起きるまでそのままじっとしていたのは言うまでも無い。しかし慣れるのも早いも

ので、鼻血が止まる頃にはすっかり転寝していた。

◆◆◆

「ん……あ」

覚醒したスルーズは自分がアリーヤの上ですっかり寝入っていたことに気付くと、慌てて体を起こした。その際、彼女の頭がアリーヤの顔面を直撃した。

「痛っ」「ぶっ」

止めと言わんばかりの激突に、アリーヤはまた鼻血を吹き出して後ろに倒れた。何が何だか分からず、ただ顔面が熱くなったアリーヤは涙目になって言った。

「何だこれ……」

「す、すいません！」

スルーズはすぐ側に落ちていた襤褸切れにも似た布を取り上げる。しかし、それには乾き切っていない血がべっとりと付着していた。

「ア、アリーヤ様？」

「さっきも出たの。鼻血」

彼女は勝手に、何かの理由でパールがアリーヤにまた突撃したものだと思い込んだ。そこで都合よく、パールは元気に走り回っている。まさか興奮しすぎて鼻血が出たなど、アリーヤは死んでも言え

ないだろうが。

上体を起こし、アリーヤはスルーズからそのハンカチを受け取る。流石に気色悪かったが、これ以外には無いので我慢するしかない。

「ありがと……」

幸運にも、彼らの後方には細い川が流れていた。それを発見して、アリーヤを冷たい水で顔を強引に擦る。こうでもしなければ、こびりついた血はなかなか落ちないのだ。

ついでにハンカチも水に晒し、鼻血の汚れだけ落とそうとする。時間が経っていたせいで、それはなかなか消えない。アリーヤは諦めて、新しい物を買おうと思った。

「すいません。お待たせしました」

スルーズは余所余所しく手を前に振った。事実、悪いのは彼女の方なので当然と言えば当然の反応だ。珍しく被害者になったアリーヤは、特に気にすることなく山道を歩いた。

それが余計に話し辛くしてしまっているのにアリーヤは気付いたが、どうしても自分から喋ろうとする気にはなれなかった。それはスルーズも同じことだろう。

「……」

「……」

アリーヤの肩に乗ったパールの鳴き声だけが断続的に響く。どうしてそんなにご機嫌斜めなの？　とアリーヤは心の中で問い掛ける。

だが、それを口に出そうが出さなかろうがこのブウサギには通じないだろう。ベーコンを食すような図太いヤツだからだ。

だが、この鳴き声が不機嫌から来るものではなく、近づいてくる危険を知らせる為だったものとは誰も知らなかった。

山道に轟く咆哮。薄い板を擦り合わせるような乾いた音。

「スルーズさん！」

「分かってます！」

アリーヤは蛇腹剣を、スルーズは左手にダガーを、右手に拳銃を構える。

やがて、木々を圧し折りながら山道に飛び出してきたのは巨大な猛獣、キングベアだ。口の周りに濃厚なハチミツを涎の様に垂らしている。続いてやってきたのは、蜂の魔物であるデスビーと、その中でも取り分け戦闘力の高いデスビーナイツだった。恐らく、デスビーたちの蓄えたハチミツを狙って、キングベアが巣を襲ったのだろう。

「どちらも気が起ってる……私はデスビーの方をやります！」

考察もほどほどに、スルーズは照準を合わせてデスビーの羽を撃ち抜いた。しかし、デスビーナイツは軽々と弾丸を避けた。ここに居る魔物は上位種だけにかなり手強そうだ。

一方、アリーヤは蛇腹剣でキングベアの巨躯を斬り裂いた。そのまま刀身は横に流れ、デスビーナイツを半分に両断する。だが、大量の血を噴き出しているにも関わらず、キングベアの方は倒れる気

配がない。

スルーズは標的をキングベアに変え、支援戦闘に移行した。見事にキングベアの四肢を撃ち貫く。気が一瞬緩んでいたのか、まだ息のあるデスビーナイツの刃の様な形状の針が迫っていることに気が付かなかった。

しかし、ここで彼女の窮地を救ったのが、アリーヤ……ではなく、彼の肩に乗っていたパールだった。

恐らくスルーズの銃弾よりも速くデスビーナイツに突撃し、魔物を木々の向こうへと弾き飛ばした。

「ナイスアシスト！」

アリーヤは横目で賞賛しながら、キングベアの丸太の様な腕を剣で受け止め、器用に懐に潜り込むと裂帛の気合とともに、強烈な一撃をお見舞いした。

「獅子戦吼（ししせんこう）！」

獅子の闘気が炸裂し、キングベアは吹き飛ばされて山道を転げ落ちていった。

脅威が去り、再び静寂が訪れる。

「スルーズさん、大丈夫……ですね」

安堵のため息を吐き、アリーヤは笑った。その無垢な笑顔に呆気を取られたスルーズは、お返しにと微笑んだ。

「はは……ははははっ」
「ふふっ」
何だかくすぐったくなって、二人は顔を見合わせて笑った。パールは短い尻尾をこれでもかと振っている。最初に比べて、アリーヤとスルーズは徐々に打ち解けている様な気もした。

第17話（後書き）

以上です。
今年も今日で終わりですか……一年、早かったですね。
感想、御意見があればコメントよろしくお願いします。

第１８話（前書き）

第１８話です。
これが今年最後の投稿になります。ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございました。来年もまたよろしくお願い致します。

第18話

ウリズン帝国首都は高い外壁に覆われ、更にはその周囲を掘り、近くの湖から水を引いている。外敵の侵攻を防ぎ、更には用水路を確立させた画期的なシステムでもある。

そんな金城湯池の都市へと入るには、東と西と南に設置された架け橋を通る必要があるが、全てに検問が敷かれている。薬物の取り締まりと謳ってはいるが、実際はウロボロス騎士団の一人であるスルーズを拘束することが目的なのだろう。上層部も本腰を入れているのか、警備兵の他にもシルバータスクなどの高名な騎士団が動員されている。

木陰から状況を窺っていたスルーズは行き詰る。橋を通るにはそれ相応のリスクを伴う。あれだけ警戒網が敷かれていれば、向こうは嫌でもこちらを発見するに違いない。直接本寮に乗り込めるなら良いが、残念ながら人間には空を飛ぶための翼はない。

「どうすればいいですかね……これじゃあ入れないよ」

親指の爪を噛み、アリーヤは呟いた。

何かないか、考えていたスルーズはあることを思い出す。それは、本寮から外壁北部に繋がっている逃げ道のために作られた通路だ。元々、ウロボロス騎士団の本寮は昔は貴族の暮らす建物だったのだ。いざという時、国外へ逃れるための道が必要だったのだろう。北側に橋を建設しなかったのはそんな理由もあってのことだった。

「アリーヤ様、ここは私に任せていただけませんか？」

万策尽きていたアリーヤは、首を縦に二回振った。こうしている時間も惜しい。二人は特に言葉を交わすことも無く、行動を開始した。

◆◆◆

「ここです」

スルーズに連れられ、アリーヤが来たのは北の外壁だ。他と比べて、橋も無ければ人もいない。高い壁が陽光を遮っているので、空気は冷たく湿っている。

「ここに、騎士団本寮へと続く通路が隠されています」
「なるほど。でも、簡単には通れなそうです」
「え？」

アリーヤは適当に石を見繕い、それを手に取ると水路へと投げ込む。それは、着水する前に真っ二つに割れた。すると、辺りに乾いた哂い声が響く。

「ククククッ……よく見破ったな」
「他の人間と違って、マナに敏感なんだ」

何も無かった筈の水面から、黒い影が徐々に濃く映った。それは段々と人の形を持ち、やがて水面から実体として現れた。それは、スルーズも何度か顔を合わせた事のある人物だった。

「ミスト？　どうして貴方がここに？」

ミストと呼ばれた男も、ウロボロス騎士団の幹部の一人である。

彼は「ミブナの里」と言う世俗から隔離された忍びの里から亡命してきた忍びで、その特性から、要職は主に密偵だ。そのミストが何故ここにいるのか、スルーズには見当もつかない。

「拙者は団長殿からここの警護と監視の役目を負っていた。だからここにいる」

「お願いします。通して下さい。私は、彼を団長の元へと連れて行かなければならないんです」

「ふむ……噂で聞いた蛇腹剣使いだな？　面白い」

すう、と水の上を滑り、ミストは大きく跳躍した。その表情はマスクで見えないが、目だけは違った。知的さを感じさせる細い目から覗く瞳は、まるで目の前の獲物に酔いしれているようにも見える。

「イガグリ流、霧（ミスト）――いざ参る」

腰から小太刀を抜いたミストがアリーヤに襲い掛かる。アリーヤは即座に蛇腹剣を抜刀し、細身の体からは考えられないほど重い一撃を受け止める。

「くっ……！」

俊敏な動きで翻弄され、まともに剣を振るう事も出来ず、防戦一方のままアリーヤは固まった。しかしただじっとしているわけではない。補助術の恩恵を受けるため、既に詠唱に入っている。

「バリアー」そして間を置かず、「シャープネス！」

戦闘準備が整ったアリーヤは、空中から斬撃を繰り出すミストの猛攻を防ぎつつ格闘技で応戦した。だが、ミストは嘲笑うかのように身を翻し、アリーヤの腹に一撃お見舞いする。

「かふっ！？」

捻じ込むように殴られ、古傷とは関係なしにアリーヤは苦しむ。

「どうした？　団長の見込んだ男はこの程度か？」

「煩いッ！！」

蛇腹剣の刀身を伸ばし、不規則な機動で刃を奔らせる。だがこれも、小太刀に邪魔をされてミストには直撃しなかった。

「そうだ。もっと来い」

――今までのは全部準備運動だったのか？

そう思わせるくらいに早く、目で捉える事が出来ない。攻撃しようにも、そこには何もないようにしか見えない。

「アリーヤ様！」

スルーズが叫んだ。アリーヤの上空に姿を現したミストは小太刀を振り被り、鷹のように急降下した。

「忍法、飯綱落とし」

金属と金属がぶつかり、キィンと剣戟の音が響き渡る。この時、ミストは全体重を乗せて攻撃を仕掛けていることを身体で感じたアリーヤは、小太刀を握る腕の手首を掴み、地面へと叩きつけた。

「ハァ、ハァ……僕の勝ちだよ」

「クククッ、まったくもって面白い男だな」

ミストはアリーヤの下腹部を蹴り上げて距離を離す。だが、もう戦う気は無い様だ。

「まあ、合格点と言ったところだろうな。もっと精進するが良いわ」

「ミスト、よろしいですか？」

「ああ、通りたくば通るがよいわ。だが、長い間使われていない通路故、魔物が居るかも知れん。気を緩めぬ事だ――」

そう言い残し、ミストは視界から消え去った。

「スルーズさん、行こう」

「分かりました」

何時の間に移動したのか、パールは彼女の腕の中で静かに目を閉じていた。

第１８話（後書き）

以上です。
ウロボロス騎士団は騎士団らしくない騎士団にしたかったので、忍者を追加しました。ミストさんはこの後も活躍しますが、期待しないで下さい。
感想、御意見などがあれば、コメントよろしくお願いします。

第１９話（前書き）

明けましておめでとうございます！
新年、今年もよろしくお願い致します。
今回は短いですが、どうぞ。

第１９話

私は故郷を守るための騎士なのに、団長の掲げる思想の元に、叛逆行為を甘受していた。果たしてそれが本当の望みなのか？　何時からか思っていた。それなのに、まだ迷っている。

確かに帝国のやり方には目に余るものがあった。けれど、それを否定することなく受け容れた国民はどうだろう？　採掘労働には駆り出されようが、一種の農産物のみの栽培を強いられようが、彼らは何も言わずに従事してきた。

なら誰が悪人なのだろう？

いいえ、この世に悪人なんて存在しない。人の考え方で、それは全て変わってしまう曖昧なものだ。例で言うなら、種族の差別などが挙げられる。殆どが歴史的な経緯で根付いてしまったものだ。しかし、厳密に言ってしまうとそれは人々にとって何の所縁もないものなのに。一方的な偏見というのは、視野を狭くしてしまう。真実を見ぬまま、目の前にあるものを事実として認識させているのだ。

今回もそう。

私たちが扇動しなければ、誰も立ち上がろうとはしないだろう。理不尽な暴力に牙を剥こうともしないだろう。

『生きているうちは、なんだって出来るんですから』

そう考える度に、あの夜に言われた言葉が蘇って、私の心を揺さぶる。

『僕に……僕たちに力を貸していただけませんか？』

そう言われて、私は引き受けた。それなのに、まだ迷っている。

私は本当にずるい女です。一度決めた事を、まだ迷っているのだから。

何故、迷うのか？　何故、決められないのか？

結局、私も煽られて動いているに過ぎない。他で決定されている事実に、仕方なく動いていただけなのだから。

でも、アリーヤ様ならそんな私を変えてくれる。そんな気がしてならなかった。

第１９話（後書き）

以上です。
次辺りでウロボロス騎士団　編の序盤が終わりますので。
御意見感想、あれば是非コメント下さい。

第２０話（前書き）

第２０話です。
今回でウロボロス騎士団　編は最後です。

第２０話

この脱出経路は長い間使われていなかった。当然のように内部では魔物たちが蔓延っている。それに加えて足場も悪く、照明が無いので視界状況も非常に悪い。これについてはスルーズが指に嵌めているソーサラーリングが解決してくれた。

「効力は様々ですが、術師や旅人には必須とも言えるアイテムなんですよ？」

少しばかり得意げに話すスルーズは、パールを抱く腕を片方だけ解いて暗闇に指を翳す。

「へえ……便利な物があるんだなぁ」

感心したアリーヤは、ソーサラーリングの照らし出す道を歩く。特に魔物に対しては厳重な警戒を払っている。スルーズが見えないのが何だか不安になって、彼女を隣に歩かせた。

「何か出そうな雰囲気」「シャレにならないんでやめてもらえますかっ？」

暗闇は恐怖心を駆り立てるものだ。今のアリーヤはそれで、スルーズは小さく笑いを漏らした。納得いかないアリーヤは、不満気に溜息を漏らす。

ここに入ってきて何気なく、バンエルティア号で一時期流行した？怖い話？を思い出した。ミブナの里からやってきた忍びの少女、藤林すず曰く「番台皿屋敷のお花さん」の話だ。

『お花さんは番台の大切にしていた皿を……』と言ったまでは良かったが、ここでキール・ツァイベルが『そんなものは迷信さ』と、幽霊の存在を否定した。本当の霊体の場合、どうやって物体と接触するのかと、根本的に矛盾していると述べた。

が、更に第三勢力が介入した。ガルバンゾ国王女、エステリーゼ・シデス・ヒュラッセイン（普段はエステルで通っている）とリフィルが異論を唱えて介入したのだ。学者然とした三人のお陰で、怪談から論議に変わったのは言うまでも無い。

他にも霊峰アブソールの地を守る精霊、セルシウスをリッドとロニ・デュナミスが幽霊と勘違いしていたのもある。ここまで来てしまうと、最早？怖い話？ではなく漫才にも等しいものだ。

そんな事を考えているうちに、アドリビトムの皆と楽しく笑い合っていた時間が何だか懐かしくなる。まだバンエルティア号を離れてから数日だが、行く先々で色々ありすぎて遠い日のように感じてしまうのだ。

そんな浮かばない表情のアリーヤに、スルーズは声を掛けた。

「あの、アリーヤ様？」「……あっ、はい。何ですか？」

「……いえ、何でもありません」

どこか寂しさを感じたスルーズはパールの頭を撫でた。気持ち良さそうに鳴くパールを見てると心が和むが、それは一時的なものだ。

（色々とご迷惑を掛けたのに、アリーヤ様は何も言わないんですよね）

寛大な人間なんだろうが、逆に彼は思いつめているのでは？　と考えてしまうのだ。スルーズとしてはとても心苦しかった。

「アリーヤ様……本当によろしかったんですか？」

遂に口にしたその言葉に、アリーヤは小首を傾げた。

「どうして、アリーヤ様はそこまでするんですか？」

「どうしてですかねぇ……言葉にするのって難しいんですけど、そうしなきゃいけないなんて思ったからだと思うんですよ」

数歩先の暗闇に目を凝らしたままアリーヤは言う。

「他人者がなんて思われるかもしれないんですけど、アドリビトムにいたせいか、どうしても首を突っ込んじゃうんですよね。仕事の依頼でも、必要以上のことをしちゃったりで……」

「疲れないんですか？」

「体力には多少自信があります」

スルーズはその問いに苦笑いを浮かべて訂正した。

「肉体的なものではなく、精神的なものなんですが……」

「あ、そっち？　気持ち的には、全然……あっ」

アリーヤ少し曇った表情でスルーズを見る。

「もしかして、迷惑でしたか？」

「い、いいえ、そんなことは決して……ただ」

スルーズは困惑するように言った。

「自分が本当は何をしたいのか、分からなくなるんです」

その言葉に、アリーヤは余裕を持った笑顔で答えた。

「なら、これから決めればいいじゃないですか？　悔いのない様に」

スルーズは一度視線を伏せ、改めて顔を上げた時には柔らかく微笑んでいた。

「――そうですね、そうします」

少しだけ、肩の荷が降りた気がする。その分を、アリーヤが持ってくれているのだろうか？　スルーズは軽くなった足取りで廃れた通路を歩いた。

◆◆◆

結局、この通路では何度か魔物と遭遇しただけでそれ以上の事は無かった。

無事に出口へと通じる梯子を見つけたアリーヤたちは梯子を伝い、その出口へと出た。

だが、その出たところが造りつけの暖炉だったので、蓋を開けたアリーヤが灰を頭から被って咳き込んだ。

「貴族の人、どうしてこんな所に出口なんか――何だよ、これ……！？」

アリーヤが見たのは、荒れていると片付けるには悲惨すぎる光景だった。家具は倒れ、壊れ、辺りに血痕のような跡が残っている。この騎士団の旗と思われる大きな布も、鋭利な刃物か何かでずたずたに引き裂かれていた。

スルーズがその光景を目にした時、彼女は口を押さえて絶句した。その部屋は、彼女もよく知る、二階の騎士団長の部屋だったのだから。

「スルーズさん、あの団長さんってこういうのが趣味なの？」

「そんなわけありません！　けど、これは一体……」

小さく肩を震わすスルーズはパールを降ろし、エルンストがいつも胡坐をかいて座っていた牛革の大きな椅子へと歩み寄った。

「皆は……皆はっ？」

急いで扉を開ける。が、やはりそこにも戦いの傷跡は残っていた。

涙目なりながら階段を駆け降りたスルーズを追いかけ、アリーヤも走った。凄惨な現場に気分が悪くなった。

寮の談話室と思わしきそこには、スルーズと同じウロボロス騎士団の制服を纏った騎士たちが数名倒れていた。スルーズは大声で呼びかけるが、残念ながら彼らは既に息絶えている。

「酷い……酷い過ぎる……」

嗚咽混じりに訴えたスルーズはあまりにも痛々しかった。唇を噛んだアリーヤは本寮の彼方此方を移動し、生存者がいないか見て回っていた。

「う……ううっ……誰か……居るのか……？」

呻き声がした方向へとアリーヤは向かう。そこは本寮に入るための出入り口の扉の外だった。

まだ若い男性だった。顔を血で真紅に染め上げ、腹部に突き立てられた斧を手で押さえている。

「大丈夫ですか！？　今手当を……」

男性は小さく首を振り、アリーヤを言葉で制した。事態に気付いたのか、スルーズも慌てて駆け寄る。

「ハッ……スルーズか」

「一体誰がこんなことを？」

「ぐふ……か、幹部連中だ……アイツら、変な魔物連れて……仲間を皆喰っていきやがった……」

荒く息を吐く男性は、もう長くないと二人は悟った。涙がこみ上げたスルーズは顔を両手で覆った。

「ハァ……ハァ……な、なあ……アンタ、以前団長とやりあったんだろう……？　なら、一つだけ……頼みがある」

「何ですか？」

震え、冷たくなった手でアリーヤの肩を掴み、騎士は一筋の涙を流して懇願した。

「アイツらを……俺たちと団長を裏切った奴らを……ぶッ殺してくれ……！！」

それが最後だった。

力を失った腕はだらりと落ち、騎士は虚空を見つめながら息を引き取った。

「……スルーズさん、聞いて下さい。まだ団長さんは生きてる」

「どうして……もう、皆はっ」

「スルーズさん前に言いましたよね？　団長さんは？レアバード？を持ってるって。さっき探したんですけど、何処にも無かった」

それは、昨日通りかかったオルタータ火山でスルーズが話したことである。

エルンストは一人、二人が乗れるくらいの試作飛行機？レアバード？を本国から借用していた。星晶を燃料として飛行する、戦略兵器として開発されていたものだった。

しかし、アドリビトムの活躍によって次第に星晶採掘量が減り、生産が困難となった？レアバード？は、最初の試作型のみを残して開発が終了したとのことだった。

「絶対に団長さんは生きてます。まだ希望を捨てちゃダメだ」

「でもっ……でもぉ……」

「貴女たちが信じた人なんでしょう？　最後まで信じてあげなきゃ」

アリーヤは立ち上がり、夕焼けに染まる空を仰いだ。

「僕はあの時、団長さんを止めようと思ってここに来たのに」

拳を強く握り締め、アリーヤは続けた。

「全部甘かった。今だったら僕、この騎士団にすぐに入団できますよ。団長さんが戦いを挑もうとした理由、今なら解る。術辛いけど、こうしなきゃいけないときもあるんですね」

その表情にいつもの笑顔は無い。無気力で、何も感じさせない。酷く冷たく、恐ろしいくらいに冷静だ。

「スルーズさん、ここから別行動で行きましょう。スルーズさんは、アドリビトムと連絡が取れる街まで行って、皆と合流してください」

目を赤く腫らしたスルーズは尋ねる。

「アリーヤ様は……？」

「すいません、もう抑え切れない」

そう言い残し、アリーヤはスルーズとパールを置き去りに正門まで歩いた。スルーズが後ろで何かを叫んだが、アリーヤはそれに耳を傾けることは無かった。

第２０話（後書き）

以上です。
まだこのままウロボロス騎士団　編で続けようと思いましたが、なんかゴッチャになりそうなので、新章に分けて投降します。
感想、是非ともよろしくお願いします。

第２１話（前書き）

第２１話です。
新章突入です。

第２１話

ウロボロス騎士団本寮とは正反対の位置に、シルバータスク騎士団の本拠地が存在する。数年間で急激な成長を遂げたウロボロス騎士団とはライバル関係にあったシルバータスク騎士団は、国内外でも名の知れた長い歴史を持つ騎士団でもある。確固たる忠義心で、ウリズン帝国の支配体制の原動力の一つとして認識されていた。

この二つの騎士団にはれっきとした役割がある。シルバータスク騎士団が表向きの仕事を扱い、世間に公表できないような役目はウロボロス騎士団が負っていたのだ。その点で言えば、ウロボロス騎士団も今日までの帝国を気付いた要因と言えるかもしれない。

両者は競合関係にはあったが、決して仲違いするような連中ではなかった。任務があれば共同で行ってきたし、祖国を守る同じ騎士として好い関係を築こうと――シルバータスク騎士団は考えていた。

しかし、今回の一件で彼らの理想は儚くも崩れ去る。最早、今のウロボロス騎士団は忌むべき存在だ。同じ騎士として、許されない事をしでかしたのだ。

だが、シルバータスク騎士団の騎士たちは他に、畏怖の念も持ち合わせていた。それは彼らの視線の先にある、ウロボロス騎士団の元幹部たちに投げかけられている。

彼ら幹部は、自分たちの騎士団が叛逆を企てていると本国に密告し、命令のもとに粛清を執行した。どんな命令にも従うのが騎士団の忠義として考えているシルバータスク騎士団の面々でも、震え上がるくらいの非道さだった。あの幹部たちはすべてにおいて逸脱し

ている、そう思うしかなかった。

返り血で赤黒く汚れたまま、ランドグリーズは椅子にふてぶてしく腰を掛けた。同志の血液が彼の残虐さを物語っている。

「ちっくしょう、団長の野郎を逃がしちまうなんて・・・・・・」

巨大な斧を立て掛け、足を組んだランドグリーズはレギンレイヴを見る。彼もまた、血飛沫を浴びて真っ赤に染まっているが、どこか恍惚とした表情で自分の震える手を押さえた。

「ああ、愉しいよねぇ……ぞくぞくするよ」

「オイオイ、勢いで俺たちに襲い掛かるなよ？」

「全くだ」

そう言って、ウロボロス騎士団の制服を着込んだガジュマの男はランドグリーズの真正面に座る。彼は二人ほどではないが、白い毛皮を赤く染め上げていた。だがランドグリーズやレギンレイヴとは違い、いつも通りの平静さを保っている。それはそれで、狡猾さを窺わせる所以ともなっているが。

「団長には逃げられたが、スルーズらしき女性が国内で目撃されたらしい」

「おッ？　まだあの女捕まってなかったの？」

ランドグリーズはシルバータスクの騎士を見たが、誰もが視線を合わそうとはしない。

「ところで、ヘルヴォルのヤツは？　さっきから全然見ないんだけど？」

「彼女なら、地下でペットの相手をしている」
「うへぇ。アレが一番恐ろしかったぜェ？」

ランドグリーズは思い出しただけでも吐きそうになる。あの気色の悪い怪物は、ウロボロス騎士団の面々を丸呑みしていた光景は想像を絶する。自分なんて可愛いものだと自負していた。

黙りこんだランドグリーズに、ガジュマは続ける。

「問題は、スルーズと同行していた男の存在だ」
「俺の予想通りならアイツしかいない。会ったことはないけどな。フリストは？」
「生憎、あの日カダイフ砂漠の方に行ったのは団長とスルーズ、以下略だ」

目の前のガジュマはエルンストから、轟かす（フリスト）者の呼び名を頂戴していた。その理由は、彼の扱う武器に由来する。

通常、身体的能力に優れるガジュマは、刀剣や格闘などを用いて戦うイメージがあるが、フリストは違う。彼はライフルを使った狙撃を好んで戦うのだ。常人よりも圧倒的に優れている五感がそれを可能としているのだ。

「まあ、お偉いさんも気前が良いよな。離反した俺たちをわざわざここに入れてくれたんだしさ。こりゃあ結果出すしかないよな」
「お前がか？　珍しいことを言うじゃないか」
「ランドグリーズさんは損得感情が激しいからねぇ！」

けらけら笑うレギンレイヴを一喝し、ランドグリーズはフリストを見据える。にやけ面が張り付いたランドグリーズを見て、フリス

トは唸る。

「むう……」

「何だよ？」

「お前は本当に戦うのが好きだな」

「唯一、自分を実感できるからな」

「――成程、ちょうどいいじゃないか」

そう言ってフリストは立ち上がり、入り口の扉に注目した。

「どうした？」

「存在感がありすぎる。随分と殺気立っているようだ」

誰もがその言葉を理解できなかったが、それはすぐに思い知らされる。

突然、木製の扉が蹴破られ、重い音を立てて床に倒れた。そこから伸びる影。夕日の光を遮る何かに、その場に居合わせた者は目を見張った。

「シルバータスクの本寮って……ここですか？」

そこには噂に聞いていた蛇腹剣使いの青年が立っていたのだから。

第２１話（後書き）

以上です。
何故だか自分でワクワクしてきました。ところで、各話のサブタイって付けた方がいいでしょうか？
感想、アドバイスがあれば、是非コメント下さい。

第２２話（前書き）

第２２話です。
スピード進行なので心許ないですが、２１話から文を書くと無駄に長かったので、いっそ縮めてみたら凄くスッキリしました。
改めて書きますが、駄文程度に楽しんでもらえればいいです。

第２２話

アリーヤは引き摺ってきたシルバータスクの騎士団員らを目の前に放った。彼らはただ気を失っているだけで、目立った外傷は特にない。

「道案内を頼みました。この様子だと間違いは無いようだ」

殺気の孕んだ眼差しでシルバータスク騎士団本寮の一階を見渡す。そこで目に付いたのは、奥に居る三人の騎士たちだ。身に纏っている制服は、同じ騎士たちの血で真紅に染まっている。幹部だと気付くのに時間は要さなかった。

「……貴方たちですか？　ウロボロス騎士団を襲ったのは？」

その言葉を聞いて、ランドグリーズたちは確信した。アリーヤこそが、エルンストが容れこんでいた騎士団員候補だと。

「だったら、どうするよ？」

「決まってるじゃないですか」

アリーヤは背中か蛇腹剣を抜き取り、剣先を幹部たちに突きつけた。

「殺しはしない。それよりもきつ～い苦痛を与える」

この蛇腹剣はその為に作られている。アリーヤはそれだけを意識して剣を振るうと決めた。

アリーヤの意思表明に、ランドグリーズは青筋を浮かべて立ち上がった。

「いい度胸だ……ちょうどいいから、死んだら切り刻んであのバケモノの餌にしてやるよっ」

「やれるものならどうぞ？」

その一言に頭の中で何かが切れる音がした。

ランドグリーズは猛り、愛用の斧を振り回しながらアリーヤに突っ込んだ。しかし、見え透いた攻撃はアリーヤには通用しない。振り下ろされた斧はアリーヤには触れず、建物の床を粉砕した。

止まっている相手を捉えることすら出来ていないランドグリーズをアリーヤは鼻で笑う。それがスルーズのあの時の仕草と似ていて、ランドグリーズの怒りは絶頂に達した。

「――どいつもこいつもォォォォォッ！！」

「剣を振るまでもないや……去ね」

獅子の闘気を蹴りとともに放出し、斧を残して壁に叩き付けられた。短く吐息を漏らし、ランドグリーズは呻く。

見切りを付けたアリーヤは剣を収めた。

「ううっ……畜生……！！」

強烈な一撃を貰って疼くが、ランドグリーズはまだまだと言った様子で再び立ち上がる。不屈の闘志を燃やし、彼はインテリアの一部と化していた飾りのハルバードを手にした。

「ソイツはな、別に武器なんてどうでもいいんだ。ただ敵を倒せるのなら、それでもいいという人間だ」

フリストが横から言葉を投げた。しかし、アリーヤは彼の名前を知らないので、ただのガジュマとしか見ていなかった。この際、種族なんてどうでもよかったのだ。

◆◆◆

（スルーズさんの泣き顔なんか、僕は見たくなかった）

最初は、何処か危険な人だと警戒していた。けれど、接していくうちに彼女は本当の自分を垣間見せた。普段は妖艶な仮面を被った、本当の意味で綺麗な女性だと思った。仲間の亡骸を目撃し、大声で泣き喚いたあの時のスルーズは本当に弱々しく、痛々しかったのだ。

アリーヤはとても辛かった。彼女はアドリビトムに押し付けて、自分だけここへ来てしまった。一刻も早く、あの場から逃げ出したかったがためだけに。

（僕はなんて弱い人間なんだろう）

重い剣を振るだけの、強引な男。

（スルーズさんには……何にもしてあげられなかった）

罪滅ぼしで片付けてしまうのはあんまりだが、それくらいしか出

来ることは無い。

（結局、ここへ来たのだって自分が納得してないだけじゃないか……）

――だとしても。

――もう、戻ることは出来ない。

――ここへ来てしまったら。

――やると決めてしまったら。

「何ボサっとしてんだよォォォォォ！？」

ハルバードを手に、それを突き立ててランドグリーズはアリーヤに立ち向かう。だが、彼を眼中にすら捉えていなかったアリーヤは呆気に取られたように立ち尽くす。

ランドグリーズに僅かな笑みが浮かぶ。勝利を確信した絶対の余裕がそこにはあった。

「おらアアァァァッ！！」

迫る矛先。鋭く光る刃。男の狂喜の笑み。誰もが固唾を呑んで見守る中、命中するはずだったハルバードの切っ先は銃声とともに柄から落ちた。

フリストが悔しそうに扉の外を睨む。

「スルーズ！？　余計なことを……！！」

瞬時にライフルを構えたフリストの右腕が銃弾に抉られ、撃ち貫かれた。

「アリーヤ様！　こちらへ！」

後ろから手を引かれ、アリーヤは駆け出していた。そこには見慣れた女性の凛々しい背中と、たなびく金色の長い髪。

「スルーズさん……どうしてっ、こんなところに？」

きりっとアリーヤを睨み付け、スルーズは再び前を見た。思わず怯んだアリーヤは言葉を失い、ただ走った。

そんな中、スルーズはきつく手を握ってアリーヤを強引に引っ張る。

「アリーヤ様はっ……一人で抱え込みすぎなんですよっ……だから、私にも、背負わせて下さいっ」

「スルーズさん……」

ただ情けなくなって、アリーヤは俯いた。それでも体はしっかり彼女を追いかけていた。

後ろから怒号が響いたが、二人の耳には届かない。それよりも遥かに小さいお互いの声の方がしっかりと聞こえる。

「私は、アリーヤ様だから出来たんですっ……アリーヤ、様だから……」

それ以上の言葉は無かった。言葉を交わすよりも、お互いを繋ぐ手を握る力が、想いが強まった。

第２２話（後書き）

以上です。
次回はアリーヤとスルーズが……
図々しくてすみませんが、読んで下さった方にお願いがあります。
意見でもアドバイスでも、批判でもいいので、よろしければ感想ください。
よろしくお願いします。

第２３話（前書き）

第２３話です。
予定だと、次回から本格的になってくると思います。

第２３話

帝国首都の地下に張り巡らされた下水道に逃げ込んだアリーヤたちは、追手を振り切った事を確認すると背中を壁に預けた。荒くなった呼吸を整えて、やっと落ち着くことが出来た。そんな状態でも、アリーヤとスルーズの手は繋いだまま。それ気付いて、お互い恥ずかしそうに腕を引っ込めるが、激しい動悸は治まりそうにない。

ただでさえ静かな地下水道内で、黙り込んだ二人に聞こえるのは水の流れる音と自分の早鐘を打つ鼓動くらいだろう。薄暗い中だと余計に意識してまって、アリーヤは頭に血が上る。

「……」

「……」

今まで何処に居たのか、種類不定ブウサギのパールが、アリーヤの足元に寄ってきた。そこで、以前アリーヤがやったように転がり始めた。

何だか慰められているような、後押ししてくれているような気がして、アリーヤは深呼吸を繰り返す。やっとの思いで昂りは静まり、アリーヤはスルーズを横目で見た。彼女は何度も何度も手を擦り合わせている。

この水道はウリズン帝国の中継地点として通ったブラウニー坑道と環境がよく似ていることにアリーヤは気が付く。違うのは整備されている事と魔物が見当たらない事くらいだ。比べるべくもなく、肌寒さが身に沁みる。

アリーヤの想像通り、スルーズは軽装の騎士団服だけなので徐々に体温を奪われていた。こんなことなら、本寮からコートを取ってくればよかったと後悔した。しかし、首都に自分たちの居場所はない上、凄惨な現場と化した本寮に戻る勇気などさらさら無かったのが実情だ。

――いつも騎士団員たちが凄い剣幕で喧嘩をしていたあの談話室。団長の雑務をこなす為の作業場と化していた会議室。食事時は混沌としていた食堂。煙草臭くなっていた団長室は、騎士団員たちが煙草や賭け事を楽しむ憩いの場だった。

思い出すだけでも涙が出そうになるが、必死にスルーズは堪える。アリーヤを助け出す直前まで、ウロボロス騎士団本寮入り口で息を引き取った男性を裏庭で埋葬していたスルーズの綺麗な手は、血と土で黒く汚れていた。

あの時、アリーヤを見込んで幹部への復習を願った騎士団員も、カダイフ砂漠でアリーヤとエルンストとの一騎打ちを目の当たりにした一人だ。彼はまだ入団してから日が浅く、以前はライマ国の若き騎士として国に尽くしていた。しかし、その国に裏切られ、彼の忠誠心は復習の炎へと変わった。そこで、エルンストが彼を自分の騎士団に引き入れた。エルンストの掲げる民主主義の思想に心を打たれた彼も、今回の叛逆を悲願としていたはずだ。

ウロボロス騎士団はそんな事情を抱えた騎士の集合体。自分たちの忠誠を弄び、食い物にした国家を許せなかった者たちが、かつての敵だったことすら忘れさせ、同じ思想のもとに、尊厳を、誇りを取り戻すために戦う同志として、仲間として認めるのにそう時間は要らなかった筈だ。何度もナンパされたことのあるスルーズも、例に漏れなかった。

だから許せない。自分たちを裏切ったあの幹部たちを。

仇を取るためなら、隣にいる青年すら利用してしまうだろう。今の彼女は、そんな憎しみに駆られていた。そこで初めて、仲間の騎士たちが抱える国家への恨みが理解できた。

「――誰か来る」

静かにそう告げたアリーヤは、背中の蛇腹剣の柄を力強く握り締めた。スルーズも悴む指で銃を握った。

アリーヤの前方からは靴底を鳴らしながら誰かが近づいてきた。暗闇に慣じんだ視覚が捕らえたのは、真新しいローブを羽織った細身の青年だった。その落ち着いた雰囲気は、学者にも似たものを感じる。

「探しましたよスルーズ。貴方が、エルンストの言っていたアリーヤ・タリズマンですね？」

アリーヤが応答するよりも先に、スルーズは引き金を絞っていた。しかし、射出された弾丸は届く前に弾かれ、あらぬ方向へと飛んでいった。

「我を失ったか、小娘」

スルーズの目の前に突如現れたのは幹部の一人であるミストだった。彼はスルーズの首もとに手を伸ばし、彼女の首を絞めたまま壁に叩きつけた。肺の中の空気を押し出され、息を吸うことも出来ずスルーズは足掻く。

「止めなさいミスト！　申し訳ない、私たちは別に危害を加えるつもりはないのです」

青年に言われ、ミストは素早く手を離した。呼吸に苦しみ、何度も何度も咳き込むスルーズの背中を摩りながらアリーヤは訊ねた。

「どういうことですか？」

「紹介遅れました。私はウロボロス騎士団副団長、ラーズグリーズと申します。後ろに居る彼は、騎士団創立当初からのメンバー、イガグリ流のミストです。彼とは一戦交えたと聞きました。まあ社交辞令はここまでにしておきましょう」

ずれそうになった眼鏡を直しながら、青年基ラーズグリーズはただでさえ細い目を更に細くし、アリーヤたちを見据えた。その傍らでごろごろ転がっている動物が一瞬気になってしまったが、今はそれどころじゃない。

「本寮が大変なことになっていました。貴方たちは何か知っていますか？」

その言葉から察するに、ラーズグリーズたちも状況がよく飲み込めていないらしい。少なくとも敵ではないことを認め、スルーズはか細い声で言った。

「ランドグリーズたちが……皆を殺したんです」

「痕跡は有りました。しかし、肝心の遺体が見当たらない。少なくとも五十名は居たはずです。昼間、私は談話室で休憩を採ってから外出していましたから。戻ってきたところで彼と合流したまではいいですが、何故かシルバータスクの騎士たちに襲われましてね」

「まだ息のあった人が居て……ランドグリーズたちが変な魔物を連れて襲撃したって……」
「成程。恐らくその魔物はヘルヴォルが飼い慣らしていたという魔物の混合体でしょう。彼女は人工的に魔物を造り出す研究をしていましたから、間違いは無いはず」

そこでスルーズが声を荒げる。止めることは出来ず、アリーヤはパールを抱いて見守るしかなかった。

「どうしてっ……どうして副団長たちはそんなに冷静なんですかっ!? 皆死んだんですよっ!? それなのに……どうして……!!」

すすり泣くスルーズをラーズグリーズは呆れたように見下ろした。平静を保っているように見えて、彼が一番怒りを感じているのだとアリーヤは思う。彼のきつく握り締めた拳がそれを物語っている。

「スルーズ、貴女はウロボロス騎士団では一番若かった。それなのに、エルンストが貴女に外交などの重要な役割を与えたのは何故だと思いますか? それは彼が貴女の能力を認め、信頼していたからだ。計画を練るにしても、貴女を交えていたのはそのためです。もし、まだ貴女がこの騎士団に誇りを持っているのなら、自分を見失わず、何が出来るかを考えて行動しなさい。いいですね?」

優しく問いかけたラーズグリーズは、返事を待たずしてアリーヤに話しかけた。

「この娘をここまで守っていただいて、本当にありがとうございました」
「これから、どうするつもりですか?」

アリーヤの問いに、ラーズグリーズは困ったように笑った。

「自分たちで蒔いた種は自分たちで刈り取る所存です」

「一体どうやって……」

訊かれても、すでに万策尽きていたラーズグリーズには何も答えられなかった。それを悟っていたアリーヤは沈んだ空気の中で考える。

国家の権力は強大だ。今回の事件を数人で解決するのはあまりにも無謀である。それを「自害」という形で終わらせるならアリーヤは許さないだろう。そうなったら、苦労してここまで来た意味が無い。無駄で終わらせるつもりはもとから無い。あの夜、スルーズに言った言葉の数々を嘘にしたくなかった。

『お前には俺たちがついてる！　だから思いっきり頼ってくれよ！』

そんなアドリビトムの皆が言った甘い言葉に、アリーヤは躊躇していた。元より関係の無い彼らに、そんな義理がある筈が無い。それでも、力になってくれると言うのなら、本当に頼っても良いのだろうか？

迷っている時間は無い。決断の時は――今だ。

「だったら、アドリビトムに来ればいい」

一同がアリーヤの言葉に呆気に取られた。その言葉の真意をあぐねたミストは訊ねた。

「拙者にはよく分からんが？」

「アドリビトムは既存のギルドの常識を遥かに上回る行動力と実力を備えています。この際、思いっきり頼らせて貰いましょう。幸い、あそこには他国の要人たちも多く在籍しているから、一件の後の支援だって――」

次々と言葉を綴る自分に驚いていたアリーヤは、頬を掻きながら照れ笑いを浮かべた。その理由も、ミストにも、スルーズにもラーズグリーズにも解らない。

「ははっ、アンジュさんの腹黒さがうつったみたいだ」

はにかんだアリーヤは切り返し、真面目な表情で言い放った。

「兎にも角にも、今は一刻も早くアドリビトムと合流しましょう。きっと力になってくれるはずだ。あ、異論は認めませんから。とりあえず、ここから早く脱出しましょう」

暫く考え込み、ラーズグリーズとミストは顔を見合わせた。

「どうしますか」

「いや、拙者もアリーヤの意見には賛成だ。この件を解決するなら、彼らの手を借りねば不可能だろう。団長殿の所在も気になる故、ここは甘えさせてもらおう」

「……判りました。ギルドの方々には、かなりのご迷惑を掛けますでしょうが」

「それを好き好んで引き受けるのも、アドリビトムの悪いところですから」

アリーヤはスルーズの冷たくなった手を引いた。惚れ惚れするような滑らかな手だった。

「元気出してください。ね？」

彼女は少し躊躇いながらも、小さく頷いてアリーヤの手を握り返した。

第２３話（後書き）

以上です。
最初の方は良かったんですけどねえ……まだ詰まるところがあって
（焦）
えー是非、感想御意見寄せていただければ幸いです。

第２４話（前書き）

第２４話です。
今回もウリズン帝国です。

第２４話

帝国首都全域に警戒令が出され、所属騎士団と警護隊が総出でアリーヤたちを探している。帝国から脱出するには、迷路のように入り組んだ水道構内を攻略するしかない。その問題はウロボロス騎士団副団長であるラーズグリーズが解決してくれた。

「いいですか？　この地下水道は造られてから三百年以上は経過しています。故に、この水道を全て把握している者はそうそういない。これは唯一で最大の武器です」

魔法で明かりを灯したラーズグリーズは、壁に描かれた何かの番号を確認する。それは、水道の位置を示したものだ。実を言うと、彼は八百年の殆どをこのウリズン帝国で暮らしてきた。最高の頭脳にして最高齢である彼は、帝国側にも広く顔の知られた人物である。ウロボロス騎士団が急成長したのには、裏付けされた実力と彼の実績が深く関わっていたのだ。

「私は以前、ここの構築にも一枚噛んでいましてね。記憶違いでなければ、ここは首都の中心部の真下。ここから更に南東へ進めば、水源であるプロメテウス湖畔へと通じる通路があります。そこからオルタータ火山へ向かいましょう。アリーヤ君、アドリビトムとは何時頃合流できますか？」

あの黄ばんだ古い手帳を確認しながらアリーヤは告げる。

「連絡が取れる街まで到着するのは、早く見積もっても三日。その間の手間で時間を取られたら、嫌でも奴らに捕捉されます」「でしたら、こうしてる時間も勿体ない。早々に発ちましょう」

ラーズグリーズはそう言って踵を返す。後ろにいた筈のミストはいつの間にか姿を消していた。

◆◆◆

かつて、巨人がその身を沈めたと言われるプロメテウス湖畔は水生生物の宝庫である。ウリズン帝国の管轄下という理由が、この湖に誰も寄せ付けない要因となっていた。だが、その管理体制は杜撰なもので、そこらには魔物が跳梁跋扈している。

そのせいなのか、湖畔へ続く通路へと近付くにつれてちらほらと魔物の姿を確認出来た。オタオタなどの小さな魔物が殆どだが、警戒するに越したことはないだろう。

「ゲコゲコが産卵期を迎えましてね、今の時期は子供のオタオタが大量に発生するんです」

様々な分野に精通しているラーズグリーズが解説する中、先行していたミストが邪魔な魔物を掃討していた。小太刀や手裏剣を駆使して迅速に処置しているミストの様は、まさしく職人だ。　流石に、イガグリ流の名は伊達ではない。

徐々に通路が上り坂になり、アリーヤは出口が近いのだと察した。

冷たく湿った空気が頬を撫でる。風だ、風が吹いている。

「もうそろそろです」

ラーズグリーズは通路の番号と記憶している番号を照会しながら進む。ここまで来てしまえば確認するまでも無いが、この状況でミスは致命的だ。絶対に犯してはならないと肝に命じていた。

そして、一行は再び地上を踏んだ。

◆◆◆

外はもう真っ暗だった。月が頭上に登っているので、もう深夜は過ぎているだろう。

澄みきった水面には赤や白の花を閉じた水草が浮いており、辺りには蛍火が彷徨っている。鈴虫の鳴く声や、風が草木を揺らす音。時折強い風が吹いて、僅かに水面を波立たせた。

マナの供給が足りていなかったダイランティアでは、各地で砂漠化が進み、この様な幻想的な風景は殆ど見られなくなった。このルミナシアに来てからはカルチャーショックばかり受けていたアリーヤは、その美しい景色に見とれ、感激のあまりに立ち尽くし、目尻に涙を浮かべた。

「……綺麗だね、とっても」

哀しそうに微笑んだアリーヤに、スルーズは思わず赤くなった。腕に抱いていたパールは降りると、アリーヤの足元でごろごろと転がる。

そこでラーズグリーズは手を打った。

「感傷に浸っている場合ではありませんよ？　まあ、迷惑を掛けるのはこちらですから何とも言えませんが」

「いえ、すいません。行きましょう」

催促されたアリーヤは、足元のパールにアップルグミを与えると、そのまま肩に乗せて再び歩き出した。ぬかるんだ地面に足を獲られぬように、気を付けて一歩一歩踏み出す。

「ところで、さっきから訊きたかったのですが、その生き物は何ですか？　私にはブウサギに見えるんですが……」

「僕たちにも分かりません。最初に出遭ったのはコンフェイト大森林です。まあ、とりあえず可愛いのと突進が凄い事だけしか」

プピッと鳴いたパールは短い尻尾を振った。八百年生きてきたラーズグリーズでも見たことが無い生物だが、最近では新種の動植物が続々と発見されている。このブウサギもその一つでは？　とラーズグリーズは納得した。

アリーヤとラーズグリーズは談笑しながら進むと、突然ミストが声を荒げた。

「後ろから何か来るッ！」

咄嗟にアリーヤたちは後ろを振り返った。そこには、凍てつく冷気を纏った魔物に跨る女性が居た。スルーズたちウロボロス騎士団の面々は、その女性をきつく睨みつけていた。

「ヘルヴォル……！」

「そんな怖い顔しなくてもいいじゃない？」
「その魔物……フェンリルですか！？」

フェンリルは霊峰アブソール奥地で生息する希少な狼だ。伝説の魔物で、常にその地を守護する氷の精霊に付き従っていたとされる神聖な獣とされてきた。

スルーズよりも肌を露出したヘルヴォルは、常時冷気を発しているフェンリルに乗っていても尚平気な顔をしている。何ともイレギュラーな女性だ。

「フフフ、この子にアナタたちの匂いを嗅がせて来たの。やっぱり優秀だわ～」
「魔物たちをそんな風に弄んで、君は何とも思わないのか？」
「別に。自分たちの都合で殺す方がよっぽど可哀そうだと思うのだけれど、違うかしら？」

その問いにラーズグリーズは言葉を詰まらせる。ヘルヴォルは恍惚な笑みを浮かべたままアリーヤを見据えた。

「あら？　もしかしなくても貴方がアリーヤね？」

アリーヤは不満げに顎を引いた。

「そんなに心配しなくても、この子はとっても幸せよ？　私のモノなんだから」
「それは、貴女の思い違いだ」

口を開いたアリーヤに、ヘルヴォルは片眉を吊り上げた。

「貴女がどんな手段で魔物を操っても、彼らは絶対に服従しないだろうさ」

蛇腹剣を抜いたアリーヤは、ヘルヴォルに剣先を向けて言い放つ。しかし、ヘルヴォルは余裕の表情を崩さなかった。

「何て言おうと勝手だけど、いつまでそうしていられるかしら？」

ヘルヴォルは口笛を鳴らす。戦闘態勢に入ったアリーヤたちは、フェンリルの背後から異様な気配を察した。

（どうしてかな。マナの流れがおかしい）

違和感を覚えたアリーヤの視界に入ったのは、鶏冠を生やした、気味の悪い体色のゲコゲコの群れだった。大きさにばらつきはあるが、大きいものだと人二人分くらいはあるだろう。

「あれは……ヒッカリカエルか！？」

「ヒッカリカエル？」

「気を付けて、　触れただけで猛毒を貰いますよっ！」

一斉に襲い掛かってきたヒッカリカエルだが、十数体いる中の二体が猛襲したミストの凶刃に斃れた。

ラーズグリーズは火属性の上級術を瞬時で詠唱し終わり、タイミングを図って灼熱の塊を叩きつけた。

「エクスプロード」

消し炭となって消えたヒッカリカエルに同情する余地も無いヘル

ヴォルは、更に数十体のヒッカリカエルにアリーヤたちを襲わせる。高みの見物をしているヘルヴォルに銃口を向けたスルーズは、即座に引き金を絞った。しかし、放たれた弾丸はフェンリルが圧縮した冷気で凍らせ、威力を相殺されてしまう。

「くっ……！？」

「甘いわよスルーズ。それに、よそ見してる場合じゃないんじゃない？」

ヒッカリカエルの一体がスルーズに飛び掛かろうとしていた。銃弾を浴びせるが、勢いは劣ることなく蛙の魔物は彼女へと襲い掛かる。接触した時点で、猛毒にやられる。目の前にある現実が、彼女の恐怖感を煽る。

「蛇喉烈破（じゃこうれっぱ）！」

飛び上がったヒッカリカエルの脇腹を、アリーヤの蛇腹剣が直撃した。何かが折れる音を立てながら、ヒッカリカエルは弾き飛んだ。

「スルーズさん大丈夫ですか！？」

「申し訳ありません！　大丈夫です！」

静かに笑いながらヘルヴォルはその様を見ていた。そして、それは忘れた頃に彼女へと襲い掛かった。

「よそ見は貴様の方だ」

気配を殺して接近していたミストに気付かず、ヘルヴォルは驚愕した。フェンリルの冷気がミストを襲うが、彼は狡猾な笑みを浮かべて刃を滑らせた。

「忍法、影走斬（えいそうざん）」
「うぐっ！？」
背中を切り裂かれたヘルヴォルは、がくがくと身体を痙攣させた。
それでも、未だに余裕の表情だけは絶やさなかった。
「フ、フフフッ……私は軍勢（ヘルヴォル）の守り手よ？　この程度の傷……」
治癒術を唱え、全快したヘルヴォルは髪を棚引かせた。
「流石にここで殺すのは無理か。ヒッカリカエルもてんでダメだし」
フェンリルを操作しながら、ヘルヴォルは背中を向ける。そこに、ミストが負わせた傷は存在しなかった。
「まあ、今日はこの辺でいいかしら」
奮戦するアリーヤたちを尻目に、ヘルヴォルはウリズン帝国首都へと戻っていった。

第２４話（後書き）

以上です。
ヒッカリカエルと言ったらカマボコグミですよね。
御意見感想、お待ちしております。

第２５話（前書き）

第２５話です。
今回は、年長ラーズグリーズが大活躍です。

第２５話

ヒッカリカエルの皮膚には、顕微鏡でやっと視認できるくらいの細い体毛が生えている。その繊毛で、体内で生成される猛毒を触れた者に与えることで外敵から身を護るのだ。その毒は、高熱や嘔吐、下痢などの症状を起こし、やがて死に至る。

この事を熟知していたラーズグリーズは、ヒッカリカエルが前衛に到達する前に撃破しようと試みるが、敵は数も多い上に広範囲に散っていた。強大な魔法は幾つか心得ていたのだが、下手に使えばアリーヤたちを巻き込んでしまう。ラーズグリーズは迅速かつ的確にヒッカリカエルを駆除し始めた。

しかし、四人に対して魔物は数で圧倒してくる。徐々に前衛と後衛の距離が詰められてきていた。単純に倒すだけならともかく、ヒッカリカエルには「触れられない」ために、作業が難航しているのだ。

アリーヤは一心不乱に蛇腹剣を振り回す。切り裂かれた魔物は力なく倒れるが、次々に湧いてくる。体力と気力ばかりを擦り減らすが、ヒッカリカエルの波は止め処なくやって来ていた。

「副団長殿！　拙者らに構わず派手にやれッ！」

「スルーズさんは後ろに下がって、副団長さんの援護を！」

痺れを切らし、アリーヤとミストは叫ぶ。スルーズは魔物を一体斬り倒してから、バックステップでラーズグリーズの前に出た。

スルーズが抜けたことで、アリーヤとミストはその穴を埋めよう

と更に戦闘範囲を広げた。アリーヤは複数を巻き込みながらの斬撃は当たり前になり、ミストは捉えられない程の速さでヒッカリカエルを翻弄し、確実な死を齎している。

「二人とも、あと二十秒で術防御に移行してください！！」

術の詠唱を始めたラーズグリーズは集中するために瞼を下ろした。遮られた視界の分を補おうと、他の感覚が冴えてくる。

詠唱開始直後、ラーズグリーズの周囲に風が吹き始めた。明け方の空が、不吉な暗雲を纏い始めた。

「天光満ところに我はあり――」

残り十五秒。

「黄泉の門開くところに汝あり――」

残り十秒。

「その雷を以って、森羅万象の理を打ち砕け――」

残り五秒。

「これで終わらせましょう」

アリーヤとミストは攻撃を中断して、自分の身体に気を張った。動きを止め、隙だらけになった二人に、ヒッカリカエルが一斉に襲い掛かる。

術の詠唱が終わり、ラーズグリーズは目を開いた。

「インディグネイション！！」

一閃。耳を劈く轟音と共に、上空から眩い光が地面に落ちる。凄まじい電撃が全てを包み込んだ。魔物たちは跡型も無く消され、アリーヤとミストは全力で雷の衝撃を堪えていた。

◆◆◆

焦げ臭さを感じながら、アリーヤは目を開いた。そこに在った筈の戦場は、ヘルヴォルの尖兵たちは消えていた。自分が残っている事の方が、明らかに不自然だと感じさせるくらいに呆気ない終わり方だ。

「終わった……のか？」

体中が痺れ、思うように言う事を聞かない。膝を着いたアリーヤの傍にスルーズが駆け寄った。

「大丈夫ですかッ……！？」

「は、ははは……本当に死ぬかと思ったよ……」

ラーズグリーズは肝を冷やしながら深く息を吐いた。あの術を使用したのは何百年振りだろうか？　それが最後の戦闘だったことも思い出す。しかし、彼の活躍はブランクを感じさせない見事な活躍だった、それがミストの感想だ。

「まあ、副団長殿には机仕事がお似合いだがな」
「自分でもそう思います」

ラーズグリーズは心の片隅で感じた。第一世代型のハーフエルフという事実に救われた。色濃く受け継いだエルフの血のお陰で、術式は答えてくれたのだと。

鳩尾にあのブウサギの体当たりを喰らい、苦痛に呻くアリーヤを見たラーズグリーズは可笑しくなって、口の隙間から笑い声を漏らした。

「ミスト」

木の幹で身体を休めていたミストは耳を傾けた。

「あの子たちは、きっと強くなりますよ」

彼はその言葉に、少し意外そうに笑った。

「……副団長殿からその言葉を聞くとは思わなんだ」
「柄にもないですけど、率直にそう思いまして」

ずれた眼鏡を直し、ラーズグリーズはミストを見上げる。返事を待っているらしく、それを察したミストはマスクを外して告げた。

「左様、拙者もそう思っていたところだ」

ミストはアリーヤを見据え、称賛の笑みを浮かべながら目を閉じた。

「二人とも、急いでここを発ちましょう」

東の空が明るさを取り戻していく。寝ぼけた太陽は僅かにその顔を出しながら、世界を朝へと導いた。

第２５話（後書き）

以上です。ちょっと短かったです。
あと何話くらいでアドリビトムが出るんでしょうかね……自分でもそう思います。
いつも読んでくださっている皆様には、感謝感謝です。
御意見感想、首を長くして待ってます。

第２６話（前書き）

第２６話です。
今回は……どうなんでしょうかね？　自分でもわかんなくなってきました。

第２６話

消息を絶って一週間が経過したが、アリーヤは未だにバンエルティア号へと帰還しなかった。彼の身を案ずる者も多かったが、今はどうすることも出来ない。

そうこうしている間にも、ギルドの仕事は増えている。ジルディアとルミナシアが融和して以降、新種の動植物が次々に発見されており、アドリビトムにも関連の依頼が数多く舞い込んでいた。事実、こうした任務で情報を得る可能性もあったので、メンバーたちは意気込んで仕事に励んでいる。お陰でギルドの評判は上がるばかり、とアンジュは複雑な感情を抱きながらデスクワークに従事していた。

確かに、名が売れればそれだけ仕事が多くなる。アドリビトムは周囲から多種多様な種族が入り混じったギルドとして知られてはいたが、ジルディア騒乱の一件で更に株が上がってしまった。アンジュとしても喜ばしい限りだが、日に日に依頼の件数は増すばかり。既に大手ギルドと同じ量の依頼を消化するに当たって、ギルドメンバーを酷使している感は否めない――いや、事実だろう。

異世界ダイランティアからアリーヤが来てくれて、正直助かっていた。一人で一パーティ分の仕事をこなしてきた彼の働き振りには誰もが感嘆していた。ルミナシアという慣れない世界でも、必死に足掻いてきたアリーヤをアンジュは尊敬していた節もある。何も知らなかったこの世界のディセンダーとは違い、彼は知った上でこの世界を生きている。後に知ったのだが、アリーヤの世界ダイランティアは半年後には世界樹が朽ち、消滅してしまうのだそうだ。この事をアンジュに伝えたのはニアタだが、彼にその事を教えたのは他でもないアリーヤだったそうだ。ニアタもそれを確認するため、別

の端末をダイランティアに飛ばしたらしいが、世界樹は計算よりも早く枯れるとの事だった。

ルミナシアで悠長なことをしてる場合でもないのに、ウリズン帝国のウロボロス騎士団がアリーヤに目を付けてしまったお陰で、百何十回目となる実験ではあるが、異世界へと転送するための装置が仕上がっても試すことは出来ない。今回、アドリビトムの誇るマッドサイエンティスト、自称天才（事実天才なのだろうが、性格が災いしてしまっている）のハロルド・ベルセリオスが着目したのは、再び確認されるようになった？純結星晶？だ。更に、隕鉄？ギベオン？を動力に取りこむことで従来の倍は研究成果が期待できるらしい。

やきもきしているアンジュだが、今は彼を信じて帰還を待つしかないだろう。

時刻は昼を過ぎた頃、遅めの昼食を摂っていたアンジュは、書類の束で埋もれている

カウンターに頬杖を着いた。肩は凝る、腰は痛める、おまけに体重は少しずつ増大している現実に溜息を吐きながら、彼女はホールを見渡した。

「アンジュ、少しいいか？」

ロックスの仕立てた尻尾袋を嵌めて、ユージーンはアンジュの元へとやってきた。至極機嫌は良かったのだが、知らせたのは悪い知らせだった。

「私が雇った情報屋から連絡が途絶えてしまった。何かあったのか

も知れん」
「……ところでユージーンさん？　その情報屋って誰なんです？
ジェイ君にも所縁のある人物だって言ってましたけど」
「……話しておいた方が良さそうだな。私が雇ったというのは、実はウロボロス騎士団の一人だ」
「えぇっ！？」
「彼は騎士団幹部の一人、？霧隠れのミスト？と呼ばれている人物でな。以前私が所属していた特殊部隊で一緒したことがあるのだが、彼は昔、忍びとしてその名を裏社会へと馳せていた。どういう事情か、情報をそのまま横流しにしてきた」
「どういう事情って……そういう事情じゃあないんですか？」
「かもしれんがな」

そこで突然、ロックス慌てて文字通り飛んできた。手にはメモらしき紙切れが握られている。

「アンジュ様アンジュ様！　大変なんですよ～！！」
「落ち着いてロックス、どうしたの？」
「い、今街から連絡がありまして、アっア、ア、ア……？アリーヤという青年が船を寄こしてほしいと言っている？だそうです！」

アンジュは驚いて開いた口が塞がらない。

直ぐに船を向かわせるように、このバンエルティア号の船長のチャットを無理矢理操舵室へと引っ張り、脅しを掛けながら舵を取らせた。聖職者らしからぬ所業に、船内に残っていたメンバーは恐怖するしかなかった。

涙目になったチャットは「ボ、ボクの船なのにぃ～～～」と嘆きながらアンジュに睨まれている様は、何とも滑稽だった。

◆◆◆

「つ、疲れた……一生分疲れた気がします……」
「若造が……少しは男らしく意地を張らんかいっ」

帝国の追撃を逃れながら、二日懸けてアドリビトムと連絡の取れる街へと辿り着いたアリーヤたちは、心身ともに疲労困憊としていた。ミストは全くと言っていいほど疲れた様子を見せなかった。常日頃から隙の無い人物だと窺わせる。

だが、アリーヤやスルーズ以上に消耗していたのはラーズグリーズだった。苦し紛れに「もう歳なんでしょうね～」などとほざいていたが、明らかな運動不足だ。年甲斐も無いラーズグリーズを微笑ましく思いながら、一行はバンエルティア号を待った。

スルーズは先ほどからパールを連れてシャワーを浴びに、ミストは何時の間にか消え、アリーヤとラーズグリーズは町長の自宅のリビングで寛いでいた。

「副団長さん」
「何ですか」
「ランドグリーズたちの目的って何でしょうね」
「私も解せない部分はありますが、今は何とも」
「簡単だろう。奴らは拙者たち以上の事態を招くつもりでいる」

もう驚く気力すら無く、虚ろな目でアリーヤとラーズグリーズは天井を見上げた。逆さの状態で自立していたミストは、マスクの下

で口を動かす。

「――国家首脳部の壊滅ではなく、国家そのものの破壊をな」

「……知ってたんですか？」

ラーズグリーズは苛々し気にミストを睨んだ。

「いや、拙者は恐らくこうなる可能性もあると踏んで、情報を取捨選択し、昔好のアドリビトムのユージーン・ガラルドに流していた。全ては、団長殿のご命令通り、な」

「つまり、あの男も馬鹿では無かったというワケですか」

眼鏡をローブで磨き、掛け直したラーズグリーズは席を立って彼方此方を移動し始めた。何かを考えているときの癖だ。頭は落ち着いて物事を考えているが、身体はそうもいかないのだろう。

「ランドグリーズたちは、まずは我々の計画を外部へと知らせ、自分たちを帝国側の人間と思わせる。その後は分かりませんが、最終的にはミストの言った通りとなるのか……」

「奴らはシルバータスク騎士団へと編成されたらしい。恐らく、シルバータスクをも引き込むつもりだろう」

「その要が、ヘルヴォル……」

「さすがに直ぐには行動せんだろう。根城は判っているのだから、焦る必要は無い」

「それでも、歯痒いですね」

「副団長殿は計画（ラーズグリーズ）を壊す者だろう？　己を信じなければ、何事も上達はせんわい」

自分の二十分の一しか生きていないのに、どうしてこんなにも貫禄があるのか？　要は、年齢とは関係なしに人は成長するのだろう。

だとすれば、多くても六百年は時間を無駄に過ごしたとラーズグリーズは反省する。

「こんな時、エルンストならどうしたでしょうか？」

「敵陣に正々堂々と殴り込みに行くだろうな」

スルーズか聞いていたアリーヤの人物像は、エルンストとは似ても似つかない。だが、何処かエルンストに似た雰囲気をアリーヤから二人は感じとっていた。

「もしかすると」

ミストが言った。

「こやつが我々の求めていた人材なのやも知れん」

「最後の最後で、人を見る目を誤らなかったという事ですね。エルンストも」

暫くして、この街の町長自身の口からバンエルティア号の到着が告げられた。

第２６話（後書き）

以上です。
次回は、アリーヤ＋ウロボロス騎士団の面々がアドリビトムと接触しますヨ。
その際は、ミストとパールがネタになると予測しています。

読者の皆様には、意見を求めるとともに感想もお待ちしております。
是非、コメント下さい。よろしくおねがいします。

第２７話（前書き）

２７話です。
今回が過去最高で長いです。前回の予告でミストとパールがなんちゃらかんちゃらって書きましたけど、次回に遅れさせて下さい。

第27話

彼の目の前に聳える大樹は、間違いなくダイランティアの世界樹だ。代々、タリズマンの一族が身命を賭して護ってきた、全ての始まりの樹。しかし、何故自分が此処にいるのか、アリーヤには皆目見当も付かなかった。

――どうして……戻って来たの？

聴き心地の良い美声。何処からか聞こえてくる女性の声に、アリーヤは耳を傾けた。

「誰か居るんですか？」

――あなたは戻って来るべきじゃなかったのに。

嘆き悲しむその言葉に、アリーヤは眉を顰めた。

「そういうあなたこそ誰ですか？」

――わたしには……名前はない。

その声の主は啜り泣くように言った。

――もし、呼ぶとするなら……。

そこで意識は現実へと引き摺り出された。

◆◆◆

町長宅にお邪魔して、机に伏せて眠っていたアリーヤはスルーズに身体を揺さ振られながら覚醒した。先ほどとは打って変わって、そこには故郷の世界樹は無かった。代わりに前脚を屈めたパールが突撃準備が整ったと言わんばかりにこちらを見つめていた。

「アリーヤ様、起きてください。バンエルティア号が到着したそうです」

スルーズからは石鹸の良い香りがした。だが、それはアリーヤが目を覚ますきっかけとはならなかった。

涎を拭き取りながら、アリーヤは席を立つ。五日分の疲れと睡魔が容赦なく襲ってくるが、それに打ち勝ってアリーヤは外に出た。

交易船が行きかう港には、アドリビトムの拠点であるバンエルティア号が着水していた。客船一つ分は場所を取るため、辺りは騒然としている。

先に出ていたラーズグリーズは、興味深くバンエルティア号を観察していた。確かに、帝国の所有する大型戦艦とはまったく違う。話によると、バンエルティア号は?永久機関?と呼ばれる技術によって稼働していて、星晶を全く使っていない。この船は大海賊アイフリードが次元を超えて乗ってきた物らしく、子孫のチャットでも詳しい事は判らないそうだ。

「それでは、アリーヤ君先頭で行きましょうか」

渋々先導するアリーヤの後方を、スルーズとラーズグリーズは歩いている。当然、ミストは相変わらずその姿を人前には見せなかった。

バンエルティア号へと近付く度に、アリーヤは湧き上がる嬉しさを抑えきれずにはにかんでいた。滅多に見ないにやけ面を、スルーズは興味深く観察していた。ラーズグリーズのそれとは理由が違い、彼女の場合は「もっと知りたい」という感情で動いている。女性に多く見られる傾向だ（アニーが言うには）。

「着きましたよ。じゃあ、行きましょう」

甲板から掛けられた渡橋を、アリーヤたちは昇っていった。

◆
◆
◆

アリーヤたちが一階ホールへと降りると、アドリビトムのメンバーが待ち構えていた。

「ただいま戻りました～」
「おかえり！　皆心配したんだよ？」
「迷惑かけてすいません」
「で、後ろの方たちがウロボロス騎士団の？」
「はい」

アリーヤの前に歩み出たスルーズとラーズグリーズはアンジュに一礼してアドリビトムのメンバーを見渡した。

「お初にお目にかかる方もいらっしゃると思うので改めて。ウリズン帝国所属、ウロボロス騎士団のスルーズと申します」
「私は副団長、ラーズグリーズとお呼び下さい。あともう一人が――」
「拙者なら此処だ」

アリーヤの後ろから突然現れたのは、ウロボロス騎士団風にアレンジされた黒装束に身を包んだミストだ。すると、アドリビトムに身を置いていたイガグリ流の忍者、藤林しいなが声を上げた。

「えッ……ど、どうしてアンタがここに……」

うろたえるしいなを余所に、ミストはゆったりとした足取りで三人の前に出た。

「ウロボロス騎士団、ミスト」

アンジュは一目で、ユージーンが密偵を依頼していた人物だと判った。

「副団長殿、もう、話してもよいだろう？」

ラーズグリーズは無言で頷き、ミストの隣へと立つ。二人が放つ異様な雰囲気に、一同は気圧されながら黙って話を聞くことにした。

「この際、洗いざらい吐き出しましょう。我々ウロボロス騎士団は、帝国に対してクーデターを行う準備を進めてきました」

この言葉に誰もが驚愕した。その中でも一番ショックが大きかったのは、各国の要人たちだ。彼らが最も気遣い、忌み嫌った叛逆の

狼煙を、ウロボロス騎士団はあげようとしていたのだ。

そんな彼らを察しながらも、ラーズグリーズは更に続けた。

「知っての通り、帝国のやり方は人道を外れました。我々が言えた事ではありませんが、この状況を打開するにはこの方法しか無かったのです。騎士団長、エルンスト・ハリファックスを筆頭に掲げた思想は、残念ながら身内によって破壊されました」

スルーズは押し黙ったままそれを聞き流していた。アリーヤは欠伸を必死に堪えて、スルーズの肩を叩いた。

「私達たち幹部の中から、裏切り者が出てしまった。彼らによって、配下の騎士たちは全員虐殺されました。刺激が強いでしょうが、どうかご勘弁を」

ラーズグリーズは頭を下げ、今度はミストが喋り始めた。

「これはまだ確定情報ではないが……奴らは拙者らとは違う。？国を変える？のではない。？国を壊す？ことを目的として行動している」

ウロボロス騎士団の言葉は衝撃の連続だった。異議を唱えようと、ガルバンゾ国の騎士団隊長、フレン・シーフォは口を開いた。騎士として、彼らのしてきたことは許されることではないのだ。

「貴方たちはどうしてそんな――」「それ以上は言わせんぞ小僧。元より、貴様らが原因なのだからな。国家の人間が、騎士を落魄れさせたのだと肝に命じておくがよいわ」

口を挟んだミストによって、フレンの言葉は続かなかった。憎悪を感じさせる冷たい口調で突き放した彼を、アドリビトムのメンバーは凝視していた。

「元々、ウロボロス騎士団は捨てられた騎士が大半を占めていました。彼らはこの計画の悲願を誰よりも願っていたんです」

ラーズグリーズは謝罪の意を込めて説明した。あまりにも生々しい現実に、メンバーたちは息を呑んだ。

「ほむら……アンタまさか……」

「……その名はとうに捨てた」

マスクを外したミストは、哀しそうに吐き捨てた。押し黙ったしいなは、複雑な表情で彼を見ていた。

「最早、我々だけで解決できるような状況ではなくなってしまった。図々しいが、貴殿らの力を拝借したいとここへ来た」

「今回の案件は、今後の帝国の進退に影響します。もし、彼らが何らかの方法で全てを終わらせるつもりなら、私たちは全力で止めなければなりません。無論、無理にとは謂いませんが、もし力を貸して頂けるのなら――」

ラーズグリーズとミストは片膝を着いた。

「この命、差し上げましょう」

アンジュは目眩を覚えた。何時から、こんな所まで来てしまったのだろう。最初は弱小ギルドだったアドリビトムが、世界の命運を握っていた時と同じ圧力が彼女に掛っている。顰めっ面でアンジュ

はラーズグリーズたちを見据えた。

「後ろのスルーズについては、容赦頂けないでしょうか。彼女はまだ若すぎます」

「そ、そんなっ……副団長……ミスト……」

力が抜けたように、スルーズはへたり込んでしまった。

この者たちは、この時点で死にに来ている様なものだ。藁にも縋る思いで、自分たちに助けを求めたのだろう。きっと、在籍しているメンバーは疑問を持ちながらも引き受けてしまうかもしれない。

「ねえ、アリーヤ君」

アンジュはアリーヤに問い掛けた。

「あなたは、どうしたい？」

アリーヤは今までの事を振り返った。

――コンフェイト大森林でスルーズと出遭ったこと。あの時は、初心と言われて少しショックだった。

――ウリズン帝国の騎士団に襲われたこと。スルーズが狙われている事に気付き、騎士団長との会談に臨むと決意した。

――スルーズと語り合ったあの夜のこと。自分は皆が思い描いている様な救世主にはなれない、それでも何かを残したかった。

――ウリズン帝国までの道のりのこと。出出しで挫いてぐだぐだ

になってしまった覚えがある。

――その過程で得た仲間、パールのこと。可愛いけど、油断ならない。恐らくスルーズの弾丸よりも速い。

――ウロボロス騎士団本寮の惨劇のこと。もう思い出したくない。

――殺された騎士が言い残したこと。懇願する騎士の遺言を言い訳として使ってしまった。申し訳ない。

――幹部たちの初対面のこと。今までの敵とは明らかに違う。一人では到底太刀打ちできないだろう。

――スルーズに助け出されたこと。自分が情けなくなった。それでも、頑張ろうと思った。

――ラーズグリーズやミストとの協働のこと。二人とも、歴戦の雄姿を彷彿とさせるような強者だ。

――魔物を弄ぶ、騎士団幹部のヘルヴォルのこと。彼女は間違っている。それだけだ。

全ての記憶が凝縮され、叩き出した答えをアリーヤは思い思いに口にした。

「出来る事なら、僕たちだけで解決したかった。でも、それは出来ないみたいです。だから、皆があの時に言ってくれた言葉に、甘えても……いいですか？」

暫く沈黙した後、ロイド・アーヴィングは力強く踏みだして踏ん

反り返った。

「ああ！　勿論だ！」

クレス・アルベインが。

「協力させてもらうよ」

スタン・エルロンが。

「アリーヤの気持ち、すごく解るよ。だから、俺にもやらせてくれ」

リッド・ハーシェルが。

「へへ、最初から頼ればいいんだよ」

カイル・デュナミスとシング・メテオライトが。

「俺たちにもやらせてよ！」

「頑張るからさ！」

ヴェイグ・リュングベルが。

「俺も協力する。サレの事もあるからな」

セネル・クーリッジが。

「この流れだと……だよな。分かった、俺もやるよ」

ルーク・フォン・ファブレが。

「まあ、ウリズンにはライマも星晶で世話になったしな」

カイウス・クオールズが。

「いいぜ、俺も！」

ルカ・ミルダが。

「僕はその……あんまり戦うのは好きじゃないけど……たくさんの人が傷つくのは嫌だから」

エミル・キャスタニエが。

「ぼ、僕もそういうのは嫌だよ？　でも……やんなきゃいけないんだよね？」

ユーリ・ローウェルが。

「へいへい。俺も頑張りますよ」

アスベル・ラントが。

「騎士として……いや、人として参加させてもらうよ」

全ては一つになった。それだけ確認すると、アンジュは呆れ返って溜息を吐く。

「――だって。貴女は？」

アリーヤは穏やかな笑みを溢しながら、スルーズに手を差し伸べた。

「スルーズさんも、いいよね？」

歓喜の涙を流し、スルーズはその手を重ねた。戦いはこれから始まったばかりなのだから、弱音ばかり吐いてはいられない。せめて、この青年に追いつけるように努力しよう。彼女は心の中で誓った。

第２７話（後書き）

以上です。
ちょっと手抜きっぽかったですね。すいませんでした。
次回こそは！　次回こそ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1414z/

Tales Of The World Radiant Mythology　-剣戟のアリーヤ-

2012年1月6日19時48分発行